

曰、黄鶴とある足れ一説今此の二説の中で何れが可なるかを判断することが出来ぬが、要するに皆小説的傳説に過ぎない、此の詩は崔灑が黄鶴樓に登つて古を懐ひ、且つ古郷を思ふの情を述べたので古今の絶唱と稱せられて居る。

**作者略傳**

崔灑は卞州の人で、開元十一年の進士である、俊才であつたけれども、素行が修まらないで、常に賭博を好み酒色に耽り、毫も人事を顧みなかつた、官司勳員外郎に至り、天寶十三年に卒した。(紀元一四一四—西紀七五四—)

昔人已乘黃鶴去。此地空餘黃鶴樓。黃鶴一去不復返。白雲千

載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹。芳草萋萋鸚鵡洲。日暮鄉關何處

是。煙波江上使人愁。

**字解**

晴川、晴れ渡つた水面。歷歷、列れる貌。漢陽、今の湖北省漢陽府漢陽縣治。

萋萋、草の茂れる貌。鸚鵡洲、武昌府江夏縣の西南二里の所にあつて、江中に跨つて居る洲、大陸一統志に、後漢、黃祖爲江夏太守、祖長子射、大會賓客、有獻鸚鵡于此洲、故名とある、或は昔し魏の黃祖が此の洲で禰衡を殺した、禰衡は嘗て鸚鵡賦を作つたから名づけたといふ説もある。

**義解**

昔人は已に黄鶴に跨り、白雲に乗じて去り、此地には空しく樓のみ残つて居る、さて黄鶴は一たび去つて復たたび返ることがなく、只白雲が悠悠として長へに在るのみである、今我れは此の樓に登つて眺望すると、漢陽の列なれる樹が、晴れ渡れる水面を通じてはつきりと見え、鸚鵡洲には、芳草が萋々と生ひ茂つて居、誠によい景色である、そこで昔人は何處に居るのであらうかと懐ふと、情に堪へなくなつて、悵望の極、忽ち郷里を思ふ念が起り、日暮になると、その念が一層激しくなつてくる、然し何程望んでも故郷は見る事が出来ず、江上の煙波茫茫として、いよゝゝ我が愁思を増すのみである。

登金陵鳳皇臺

李白

**題意**

金陵は今江蘇省江寧府上元縣治に屬して居る、此の地は昔し吳王孫權が始めて都を建てた所で、當時は建業と稱した、その後東晋の元帝が亦都を此處に定めてから、宋齊梁陳等相繼いで都して南朝と號し、歴史に富んで居る所である、鳳皇臺は金陵城の南に在つて、其起原は、宋の元嘉中に王顓といふ人が、此の地に鳳皇が翔集し、音聲諧和して衆鳥群附するのを見て臺を建て、名づけて鳳皇臺といふたといふことで、臺は江山を四顧し、井邑を下瞰し、尤も景勝の地であつたといふことで



ある、是より先き李白は楊貴妃高力士などに讒せられて長安を去り、四方を周遊して武昌に至り、前に講じた黃鶴樓に上り、詩を題しようとしたが、避上に崔灑の詩が題せられてあるを見て深く嘆服し、終に筆を投じて去り、更に金陵に遊びて鳳皇臺に登り、崔灑が黃鶴樓の詩に擬して、此の詩を作つたので、獨り古を弔ふて懷を興すのみでなく、又讒邪君明を蔽ひ、賢路閉塞せらるゝを慨したのである。

鳳皇臺上鳳皇遊。鳳去臺空江自流。吳宮花草埋幽徑。晉代衣冠成古丘。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。總爲浮雲能蔽日。長安不見使人愁。

**字解** 吳宮、吳王孫權の宮殿。晉代、東晉方輿勝覽卷の十四に、東晉元年渡江復都建業とある。三山、今の江蘇省江寧府江寧縣の西南にある山で、輿地志に、其山積石濱于大江、有三峯南北相接とある。半落、青天外、三山の高いのを形容したのである。即ち三山は極めて高く雲を凌いで王に逼つて居るから、地から見ると秀峯とは見えないで、却て天上から落かゝつた様に見えるとの意。二水、秦淮の二水、此の川は源を江蘇省溧水縣から發して西北に流れ、遂に大江に入るので、史正志の二水亭の記

に、秦淮源出句容溧水兩山間、自方山合流、至建康、分爲二支、一支入城、一支繞城外、共夾一洲、曰白鷺とある、此の白鷺は、此の詩でいふ白鷺洲のこと、即ち金陵の西南八里の所にある。浮雲能蔽日、陸賈の新語に、邪臣蔽賢、猶浮雲之障日月也とある、又楊柳行に、纔邪害公正、浮雲蔽白日とある。

**義解** 此の鳳皇臺には昔し鳳皇が來て遊んだといふことであるが、今はその鳳皇も飛び去つて在らず、空しく臺ばかり残つて居、唯變らぬものは臺下を流れる江水のみである、さて此處は吳王の舊都、花草繁華の地であつたが、今は幽徑に埋もれて荒廢し、晉代にも亦都であつたから、衣冠輻輳の盛を極めたことであるが、今は古邱となつて一物も留めない、げに榮華は夢の様で、眞に長嘆に堪へぬのである、さて又臺に登つて見渡すと、三山は半ば雲にかくれて、丁度天から落ちた様に見える、秦淮の二水は白鷺洲を取り巻いて流れて居、其の景色は如何にもよいが、顧みて西方を見ると、浮雲漠々として白日を蔽ひ、長安は何の邊にあるか分らない、我れは之に因つて讒臣君明を蔽ふことを思ひ出し、悵然として愁へたことである。

早朝大明宮呈兩省僚友

賈至

題意

大明宮は禁苑の東に在つて南北五里東西三里の廣さである、此の宮殿は太

唐詩選釋

七言律 早朝大明宮呈兩省僚友



宗の貞觀八年の建置で、初め永安宮と稱し、高宗の龍逆元年に蓬萊宮と改め、尋いて大明宮の舊名に復した。兩者は門下中書の二省である。此の詩は賈至が早く大明宮に朝した時の光景を寫し、門下中書兩省の僚友に示したのである。

**作者略傳**

賈至字は幼鄰、洛陽の人、父曾は開元の初制誥を掌つた。至は明經第に擢んでられ、褐を單父尉に解き、尋いで起居舍人知制誥に拜せられた。玄宗蜀に幸し、肅宗靈武に即位するに當り、策命を撰して其の草藁を進めた。帝は之を賞して、先帝の誥命乃父之を爲る、今茲命策又汝之を爲す、兩朝の盛典卿の家の父子に出づ、盛なりと謂ふべしと曰はれた。中書舍人を經、至德中小法に坐して岳州司馬に貶せられた。が、寶應の初召されて故官に復せられ、大曆七年右散騎常侍を以て卒した。年五十五。  
(紀元一四三二) 禮部尚書を贈られ定と謚された。  
(西紀七七二)

銀燭朝天紫陌長。禁城春色曉蒼蒼。千條弱柳垂青瑣。百轉流鶯遶建章。劍佩聲隨玉墀步。衣冠身惹御爐香。共沐恩波鳳池上。朝朝染翰侍君王。

**字解**

銀燭、燭光銀の如きともしび、即ち立派な提燈のこと。韓愈が詩に、銀燭未消窓

送曙とあり、五律春夜別友人の詩にも、銀燭吐青烟、金尊對綺筵とある。朝天、參内すること。紫陌、帝都の御衢をいふ。天に紫微垣が有つて、人主の宮は之に象つた。故に宮を紫宮又は紫禁と曰ひ、殿を紫宸と曰ひ、京都の衢を紫陌と曰ふのである。禁城、御所。青瑣、連瑣の模様を刻み、青漆にて塗つてある宮門。漢書元後傳に、曲陽侯根驕奢、借上赤墀、青瑣とある。建章、漢の宮殿の名。史記武帝本紀に十一月乙酉、柏梁、莪(略中)於是作建章宮、度爲千門萬戶、前殿度高未央とある。こゝでは漢宮の名を借りて唐の宮殿に譬へたのである。玉墀、玉石を敷いてある立派な階上。恩波、恩澤と同じ。鳳地、中書省の別名。晉書荀勗が傳に、以最守尚書令、最久在中書、專管機事、及失之、甚惘々悵々、或有賀之者、最曰、奪我鳳凰池、諸君賀我邪とある。中書監令は詔敕を掌つて極めて樞近の地に居、多く君寵を承くる故、之を榮とし、天上の鳳凰池に比してかくいふたのである。

**義解**

我れは早朝に參内する爲めに、銀燭を點して家を出で、紫陌の大道を徐ろに歩いたことである。かくて禁城に近づく頃、夜も漸く明け、そこにある樹木は、何れも春色を帯び蒼々として雅氣を含んで居た。それから宮門に到ると、そこには枝が千條も垂れて居る柳があつて、それが曉色を帯び、得もいへぬ趣があつた。之を通つて



いよく建章宮に入ると、幾百の鶯が玉を轉すが如き麗しい聲で轉つて居て、宮殿の天地は太平の氣が満ちて居た、かくて宮殿の玉墀を歩くときは、帶劍と佩玉とは、歩くに随つて鳴り、それから朝堂に上つて御前に近づくとき、御爐の香烟は馥郁として衣冠の身に薰じ、崇高の感に打たれることである、さて我れは諸君と共に、君王の恩澤に浴して中書の役を勤め、毎日筆を執つて詔敕を書き、君王の傍に侍つて居るのは、實に無上の光榮であつて、我れは獨り肝に銘し難有涙に咽んで居ることである。

和賈至舍人早朝大明宮之作

王維

**題意**

此の詩は、前の賈至の作に和して作つたのである。

絳幘、鷄人報曉籌、尙衣方進翠雲裘。九天闔闔開宮殿、萬國衣冠拜冕旒。日色纔臨仙掌動、香烟欲傍袞龍浮。朝罷須裁五色詔、佩聲歸到鳳池頭。

**字解**

絳幘、鷄冠に象つた朱き冠、鷄冠は和名トサカと曰ひ、鷄の頭上にある花の様な赤い肉をいふ。鷄人、夜明けを報する役人、周禮春官雞人職に、大祭祀、夜嘯旦以詔百官とあつて、注に、夜、夜漏未盡、鷄鳴時也、嘯旦、以警起百官、使夙興とある、又同書巾車

職にも、大祭祀、鳴鸞以應、雞人とある。又漢官儀に、宮中輿臺並不得畜鷄、夜漏未明三刻、鷄鳴、衛士候於朱雀門外、著絳幘、專傳鷄唱とある。曉籌、夜の明け方。尙衣、唐書百官志に、尙衣、掌供冕服とある、すべて天子の物を掌るを尙と曰ひ、唐の宮中には、尙衣、尙倉、尙藥等の官があつた。翠雲、裘、翠色の絲で雲形の縫箔を施した着物、宋玉が風賦に、主人之女翳承日之華、被翠雲之裘とある、こゝでは借りて天子の朝服を稱したのである。九天、九重天と同じ、御所のこと。闔闔、天門、即ち宮殿の表御門。冕旒、天子の冠、禮記王制に、天子冕十有二旒、以絲繩貫玉垂之前後、曰旒とある、王維が五言排律送朝集使詩にも、萬國仰宗周、衣冠拜冕旒とある。仙掌、金莖のこと、七古長安古意を見よ。袞、龍龍の繡ある天子の法服、委しいことは左傳桓公二年傳を見よ。五色、詔、後趙王の石虎が故事、鄴中記に、後趙王石虎、詔書用五色紙、著木鳳、口銜出とある。**義解** 賈君が詩の通り、早朝する官人が銀燭を點じて紫陌を歩む頃は、宮中では、絳幘を戴いた鷄人が、宮門の外で鷄の鳴き聲をして曉を報じ、又尙衣の役人が、その聲を聞いて翠雲の衣を天子に進める時である、かくて夜も全く明けて、宮殿天門を開けると、天子はその翠雲の朝服を着て正殿に出御せられ、彼の劍佩の聲は、玉墀の歩に随ふて來る百官の朝拜を受けられることであるが、その時は吐蕃回紇の諸外臣



も亦朝班の末に在つて、共に冕旒を召されたる天顔を拜することで、聖天子の德澤は遠く四疆に光被し、誠に盛んなことである。さて又百官が天顔を拜する時は、殿外では旭日が瞳々として階前の仙掌上に映じて居、殿内では、御爐の香烟が御衣の袞龍に添ふて立ち上るので、熙々たる太平の象は、殿の内外に溢れて居ることである。かくて朝儀は一通り済み、百官は皆退朝するが、獨り中書舍人のみは、五色の詔を草する職責があるから、佩玉の聲珊珊々として、鳳池の頭即ち中書省を指して歸り、命の下るのを待つて居ることである。

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作

應制

王維

**題意** 蓬萊は大明宮、興慶は皇城の東にある宮殿、閣道は複道、留春は閣道中にある閣の名、蓬萊宮より興慶宮に至る間は、數里に離れて居るから、閣道を架して往來を通じてある。此の詩は玄宗皇帝が、その閣道を通つて蓬萊宮から興慶宮に行幸するとき、途中留春閣で休憩せられ、雨中春望といふ題で詩を作り、王維に命じて之に和せしめられたから、王維は詔に應じて之を作つたのである。

渭水自縈秦塞曲、黃山舊繞漢宮斜。鸞輿迥出千門柳、閣道廻

看上苑花。雲裡帝城雙鳳闕、雨中春樹萬人家。爲乘陽氣行時令、不是宸遊玩物華。

**字解** 秦塞、長安は秦漢の故都である。秦は四塞の國で、山を被り水を帯びて居る。故に、秦塞といふたのである。黃山、長安の西北にある山、然し小丘の連亘して居るのであると見え、大淸一統志には出て居ない。漢宮、黃山にある黃山宮を指す。此の宮は漢の惠帝が建てたのである。迥出、千門、柳、閣道は山に傍ふて高架し、迥く千門柳色の上に出て居るから、かくいふたのである。上苑、上林苑のこと。上林苑は秦の舊苑で、長安の西にある。漢書蕭何傳に、何爲民請曰、長安地陋、上林中多空地、願令民得入、田、母收糞爲獸食、とあるから、その廣いことも分も、又西京雜記に、初修上林苑、群臣遠方、各獻名果異樹、とあり、三輔黃圖にも、苑は周袤三百里、離宮七十とある。雙鳳闕、並ひたる二の門。時令、天子が四季の時序に應じて德を布き惠を施すこと。禮記月令に、立春之日、天子親帥三公九卿諸侯大夫、以迎春於郊、命相布德和令、行慶施惠、下及兆民とある。物華、風景。

**義解** 閣道から見渡すと、渭水は従前の通り、自ら秦塞即ち長安城を繞つて流れて居、黃山も亦舊に依り、漢宮を繞つて斜に走つて居、帝都山河の景は、實に雄大なこと



である、さて今日天子の鸞輿は關道を通り、遠く千門柳色の上に出で、その留春閣で休憩せられたことであるが、その留春閣から見渡すと、上林苑の花も見え、又雲裏の帝城は、空濛の中猶ほ雙峙の鳳閣を認められ、雨中の春樹は、霏微の間遙に萬戸の人家と共に望むことが出来、身はさながら畫中にある感がある、さて古の聖王は、四季の時命に應じて德澤を民に施した、故に今回鸞輿が出遊せられたのも、亦古聖王の如く、陽氣に乗じて時令を行ふ爲めで、決して遊宴に耽り風景を賞玩するので無いから、此の聖世に生れた我々は、實に仕合せなことである。

酌酒與裴迪

王維

裴迪は關中の人で、王維崔興宗等と終南に居り、琴樽自ら娛んだ、天寶の後蜀州刺史となつたが、歿年は分らない、詩意によつて考ふると、裴迪は官吏を志願し、人に推薦を頼んだけれども、思ふ様に行かぬので、怏々として居たところから、王維は此の詩を作つて裴迪に與へ、之を慰藉したのであるらしい。

酌酒與君君自寬。人情翻覆似波瀾。白首相知猶按劍。朱門先達笑彈冠。艸色全經細雨溼。花枝欲動春風寒。世事浮雲何足

問。不如高臥且加餐。

字解 自寬物を心配せずに氣を大きく持つこと。白首相知猶按劍、史記鄒陽傳に、諺曰、有白頭如新、傾蓋如故、何則知與不知也とある、又同傳に、臣聞明月之珠、夜光之璧、以闇投入於道路、人無不按劍相眄者、何則無因而至前也とある、此の句は之れに本づく、朱門歴々の家、先達友人の己れより先に立身出世したる者。彈冠冠の塵を拂ひ、出で、仕へる用意をすること、漢書王吉傳に、吉與貢禹爲友、世稱王陽在位、貢公彈冠、言其取舍同也とあつて、注に、彈冠者且入仕也とある。

義解 君は今志を當世に得ないで、頻りに憤懣して居るが、我れは酒を酌んで君に與へるから、君は之を飲んで自ら氣を大きく持ち玉へ、今や人情の翻覆は波瀾の如くで、見る／＼易ることである、即ち白頭になる迄知己の交りをした仲でも、少しく貧乏になると、道で遇ふても知らぬ振りをするのは愚か、時によつては明月の珠を闇中に出した如く、劍を按じて對することもある、又朱門の先達も、昔し漢の王吉の様な人は一人も無く、その舊友が冠を彈じて推薦を依頼しても、笑つて相手にせぬ輩は、天下滔々として皆然りで、人情の反覆は實に浩嘆に堪へぬ次第である、今試に庭上を見るに、彼の草色の正に緑であるのは、全く細雨の濕を得た爲めであるが、花



枝の綻びんとして又萎んだのは、春風の寒峭に逢ふたからである。此れと同じく、花に較ぶべき賢人は、沈淪して下流に居り、草に比すべき愚人は、時を得て榮えて居る。冠履顛倒の世の中であるから、君が志を得ぬのは尤なことである。されば浮雲の如き世上の事を、彼れ是れと憤懣するのは無益なことであるから、須らく枕を高くして亦臥し、好きな物を自由に食べ、悠々として自適するのが第一である。何も區々たる爵祿などを羨むには當らぬのである。是れ我れが酒を酌んで、君に與へ自ら寛ふせよと曰ふた次第である。

題璿公山池

李 頎

璿公は僧の名であるが、其の事蹟はよく分らない。此の詩は璿公が山池を咏したのである。

遠公遁跡廬山岑。開士幽居祇樹林。片石孤雲窺色相。清地皓月照禪心。指揮如意天花落。座臥閒房春艸深。此外俗塵都不染。唯餘玄度得相尋。

字解

遠公、晋の僧慧遠、高僧傳に、晋、惠遠見廬峰、清淨足以息心。始在龍泉精舍、刺史桓

伊乃爲遠於山東立房殿。即東林也。廬山今の江西省南康府星子縣治の西北二十里にある山で、即ち遠公が栖隱した處、輿圖廣記に、廬山三面阻水、西臨大陸、爲群山所奔、巖山無主、峯蜿蜒聯、指列數條、各自爲勝とある。岑、ミネと訓し、峯と同じ。開士、大士又は祖師と同じ、釋氏要覽に、開達也。明也。解也。士、士夫也。經中多呼菩薩爲開士。前秦苻堅賜沙門德解者爲開士とある。こゝでは璿公を指す。祇樹林、天竺祇陀太子の園で、寺院を建てたところ、金剛經の註に、須達多長者、白佛言、弟子欲營精舍、請佛住。惟有祇陀太子園、廣八十頃、林木鬱茂、可居。白太子。太子戲曰、滿以金布、便當相與。須達出金布八十頃、精舍告成、凡千參百區とある。憚心、悟りの心。指揮、振り回はすこと。如意、僧の持つ法具、和漢三才圖會に、釋氏要覽云、如意有二義、一曰古之爪杖柄、長三尺許、或脊有痒、手所不至、用以搔之。如人之意、故名。一曰今講僧尙執之多、私記節文祝辭於柄、備忽忘如人之意とある。又同書に、梁武帝賜昭明太子木犀如意、蓋心之表也。故菩薩皆執之。狀如雲葉、又如篆書心字。只如文殊、亦執之。則豈惟搔痒記憶之用乎とある。天花、天から花を雨らせしこと、法華經に、天雨曼陀羅花、曼珠沙花とあり、維摩經にも、室有一天女、以天花散諸菩薩大弟子。上花至諸菩薩、皆落至弟子、便着不墮とある。玄度、晋の高士許遠なり、晋の何法盛が晋中興書に、高陽許遠字玄度、丹陽許玄字遠遊、共清高不



仕。詢有<sub>レ</sub>才藻能<sub>レ</sub>清言<sub>ヲ</sub>。玄山居服食志求<sub>レ</sub>仙道。遊會稽臨海山誓<sub>レ</sub>不歸家。乃與<sub>レ</sub>婦書令改適。後入<sub>レ</sub>剡淪山莫<sub>レ</sub>知所止。或以爲<sub>レ</sub>昇仙とある。

**義解** 璿公の山房は、昔し惠遠法師が跡を遁れた廬山の岑と同じ趣があり、又璿公が山に據つて幽居して居るのは、佛が祇樹林中に在ると同じ想がする、さて山にある片石も孤雲も、皆高僧璿公の色相を窺ひ居る様に見え、清池も皓月も、共に璿公の禪心を照す様に見え、璿公其の人は、實に光明無垢の境界に安じて居ることがわかる、更らに又思ふに、璿公が如意を指揮して説教したならば、微妙なる奇特をあらはし、天花がばらばらと落つるかと思はれ、殊に閑房にのみ坐臥して居るから、春草は自ら深く幽徑を瑣し、璿公の左右には一點の俗塵を交へない、唯俗といふのは、昔しの許玄度の様な清高の士で、此の様な人だけが、時々相訪ふて清談するばかりであると、作者自ら玄度を以て任じ、璿公の悟道を頌し、且つ自ら地歩を占めたのである。

望<sub>レ</sub>薊門

祖 詠

**題意** 薊門は五律自薊北歸の詩に説いてある、此の詩は蘇門に兵を用ゐるを見て慷慨し、落魄の書生なる作者も、奮つて軍に従ひ、功を建てたいとの意を咏じたのである。

**作者略傳** 祖詠は洛陽の人、開元十三年の進士(紀元一三三八、西紀七二五)張説引いて、駕部員外郎と爲した。

燕臺一去客心驚。笙鼓喧喧漢將營。萬里寒光生積雪。三邊曙色動危旌。沙場烽火侵胡月。海畔雲山擁薊城。少小雖非投筆吏。論功還欲請長纓。

**字解** 燕臺、昭王の黄金臺、五古薊丘覽古を見よ。笙、鼓、箛、鼓の意、歌舞の意では無い。漢將、唐人は漢を借ることがくせで、前にもその例があつた。三邊、東西北の三面。危旌、高き旌。沙場、砂地の戰場。海畔、今の渤海を指す。投筆、吏、請長纓、共に五古述懐に説いてある。

**義解** 一たび都を去つて燕臺に来て見ると、客心爲めに驚かざるを得ないことがある、今や征戰相迫つて居ることであるから、漢將の陳營からは、箛鼓の聲が喧々としてかまびすしく起つて居る、又薊門は胡地に接して居るから、萬里の積雪は皚々としてしく白く、寒光爲めに膚を裂くばかり、特に敵は三面から我れを圍まんとして居ることであるから、我が危旌は寂しく曙色に對して動いて居る、かくて敵は愈々迫



り、我れはいよ／＼警戒して居るから、沙場の烽火はしきりに擧げられ、胡月もその煙の爲めに光を奪はれて居る、おまけに我が薊城は北海に接し、雲山遙かにその城外を擁し、絶えて援軍がないから、勝敗の決はいまだ容易に決めることが出来ず、誠に心配なことで、苦心爲めに驚くのも、つまり之れが爲めである、さて我れは少小より吏と爲り、昔の班超の様に筆を投じたことは無いが、今此の戦陣の有様を見て、敵愾心がむら／＼と起り、せめては昔しの終軍の如く、還つて長纓を請ふて出陣し、此の邊寇を平げ、功を國家に立てたいと思ふことである。

九日登仙臺呈劉明府

崔署

**題意** 九日は九月九日、即ち重陽の節である、此の日は高い所に登り、菊花の酒を飲むのが恒例で、これは桓景から起つたのである、續齊諧記に、漢桓景從費長房學道、謂長房曰、九月九日汝家當有災厄、急令家人作絹囊盛茱萸、懸臂登高山飲菊花酒、禍乃可消、景如其言、率家人登山夕還、見雞犬牛羊皆死、房曰、此可以代人矣、則登高始於桓景とある、仙臺は望仙臺で、今の河南省陝州城の西南にあつたので、漢の文帝が之を建てたのである、葛洪が神仙傳に、河上公者、莫知其姓字、漢文帝時、公結草爲庵于河之濱、帝讀老子經、頗好之、(中)聞時皆稱河上公解老子經、義旨、(中)帝即幸其庵、躬問之、(中)公乃授

素書二卷、與帝曰、熟研之、此經所疑皆了、不事多言也、余注此經、以來一千七百餘年、凡傳三人、連子四矣、勿以示非其人、言畢、失其所在、須臾、雲霧晦冥、天地愜合、帝甚貴之、とあつて、望仙臺は此の時に建てたといふことである、明府は刺史太守縣令いづれにもいふのである、此の詩は作者が重陽の節、恒例に依つて望仙臺に登り、之を賦して靈寶縣の令劉某に示したのである。

**作者略傳** 崔署は宋洲の人で、開元二十六年の進士である(紀元一三九八—四七三)

漢文皇帝有高臺。此日登臨曙色開。三晋雲山皆北向。二陵風雨自東來。關門令尹誰能識。河上仙翁去不回。且欲近尋彭澤宰。陶然共醉菊花杯。

**字解** 高臺、望仙臺。此日、九日。三、晉、韓、魏、趙の三國を指す、戦國の時、晋は此の三國に分領せらる、故にいふ。二、陵、今の河南省河南府永寧縣の北六十里に肴山がある、其肴山に此の二陵があるので、左傳僖公三十二年傳に、殺有二陵焉、其南陵、夏后臯之墓也、其北陵、文王之所辟風雨也とある。關門、令尹、函谷關の令尹喜、史記老莊申韓列傳に、老子見周之衰、適遂去、至關、關令尹喜曰、子將隱矣、彌爲我著書、於是老子適著書上



下篇言道德之意五千餘言而去莫知其所終となる又漢の劉向が列仙傳にも關令尹喜者關大夫也善內學常服精華隱德修行時人莫知老子西遊喜先見其炁知有真人當過物色而遮之果得老子老子亦知其奇爲著書授之後與老子俱遊流沙莫知其所終とある。河上仙翁題意の條にある河上公のこと。彭澤宰彭澤の令となつた晋の陶淵明のこと彭澤は今の江西省九江府彭澤縣治に屬して居る。醉菊花杯菊花を酒杯に入れて飲むこと晋の檀道鸞が續晋陽秋に陶潛九月九日無酒於宅邊菊叢中摘盈把坐其側望見白衣人乃王弘送酒即便就酌而後歸とあり又西京雜記に九月九日佩茱萸食蓬餌飲菊花酒令人長壽とある。陶然樂む貌。

**義解** 昔し漢の孝文帝が建てられた望仙臺は今尙ほ高く天空に聳えて居るさて今日は九日で重陽の佳節であるから余は恒例に従つて此の臺に登臨し風景を賞したことであるが折しも曙色漸く開け遠近山河の風物は盡く眼前に現はれたことである即ち三晉の雲山は皆北方に向つて並んで居文王が風雨を避けたといふ二陵のあたりは今も雨が降つて居るのか東からかけて曇つて居た思ひ起せば昔し春秋の世仙人と共に遊んだといふ關門の令尹喜は今誰れも知つて居る者が無く又漢の文帝の時に河上翁といふ仙人があつたが此の人一去して歸らず今に至るも杳として便りが無いされば仙人などは羨むに足らぬことである幸ひ今日は重陽の佳節であるから彭澤の令であつた陶潛に比すべき君の處へ行き快く菊花の杯に酔ひ心ゆくばかり此の佳節に酬ひやうと思ふが君の考は如何であるか多分余に賛同せられることと思ふ。

送李少府貶峽中王少府貶長沙

高適

**題意** 少府は縣令の屬官峽中は夔州志に瞿塘峽兩岸對峙中貫一江灘瀆堆當其口乃三峽之門與巫峽歸鄉峽連亘七百里俱稱峽中とあつて即ち今の四川省夔州府巫山縣治である長沙は今の湖南省長沙府長沙縣治に屬して居る此の詩は王李の二少府が讒を蒙りて峽中と長沙とに分謫せられるに當り之を送つてその意を慰めたのである。

嗟君此別意何如。駐馬銜杯問謫居。巫峽啼猿數行淚。衡陽歸雁幾封書。青楓江上秋天遠。白帝城邊古木疎。聖代即今多雨露。暫時分手莫躊躇。

**字解** 謫居貶せられて行く所。巫峽啼猿巫峽には猿が多く常に悲しげな聲で啼



いて居るので、山川記にも、峡中猿鳴、行者歌曰、巴東三峽猿啼長、悲猿鳴、至三聲聞者淚沾衣とある。衡陽今の湖南省衡州府衡陽縣の治。歸雁方輿勝覽に回雁峯在、衡陽之南、雁至此不過、遇春而回、故名とある、回雁峯は今の湖南省衡州府清泉縣の南一里にある山で、南岳七十二峯中の首である、山海經の注に、衡山、南岳也とあり、また徐靈期が南岳記にも、南岳周廻八百里、回雁爲首とある。青楓江、七古春江花月の詩を見よ。白帝城今の四川省夔州府奉節縣の東にあつた城で、漢の光武の時公孫述が築いたのである、水經注に、白帝山城、周廻三百八十步、北緣馬嶺、接赤岬山、其間平處南北相去八十五丈、東西十七丈、東傍東瀆溪、即以爲隍、西南臨大江、闕之眩目、唯馬嶺少差、委逆、猶斬爲路、羊腸數回、然後得上とある。

義解

さて、君等は今日の此の離別を何と思つて居らるゝことであらうか、余は馬を駐め、杯を口にして君等と餞飲する間に、君等に、謫所は何處であるかと問ふてさへも、涙が出るのであるから、君等の胸中は實に思ひやらるゝことである、聞けば李君の行く所は峽中だといふことであるが、巫峽の猿は三聲で人に腸を断たせるといふ位であるから、李君もこゝを通つて之を聞いたならば、必ず數行の涙に袖をしぼることであらう、又王君の赴く所は長沙だといふことであるが、長沙の南

に當る衡陽附近には、回雁峯といふ高山があつて、雁はその南には飛ばず、すぐに後に引き返へすといふことであるから、王君も昔しの蘇武の如く、幾封の書を此の歸雁に托して都の妻子に送られることであらうか、此の歸雁も王君の爲めには頗る悲痛の種であらう、又王君は青楓江あたりで、秋天の遼遠なるのを望んだならば、いよゝ身は遠く異郷に貶謫されたのを思ひ浮べるであらう、又李君も白帝城の邊り、古木の蕭疎たるを見たならば、如何ばかり悲しく思はるゝことであらうか、二君の前途は此の如く悲しくある、然し今は聖天子が上に在つて、四民皆その仁政に浴して居るから、君等も近き將來に於て、召還せられることは疑ひが無い、さらば今日の別れは只暫時の別れであるから、君等も躊躇せず、兎に角往つて來給へ、何にも左迄悲むには及ばぬことである。

和賈至舍人早朝大明宮之作

岑參

題意 賈至が早朝大明宮の詩を作つて僚友に示したことは、前に講じた通りである、此の詩は其の詩に和して作つたのである。

鷄鳴紫陌曙光寒。鶯囀皇州春色闌。金闕曉鐘開萬戶。玉階仙仗擁千官。花迎劍佩星初落。柳拂旌旗露未乾。獨有鳳皇池上



客陽春一曲和皆難。

**字解** 皇州帝都。金闕帝居。仙仗兵仗。陽春一曲宋玉の對問に客有歌於郢中者

其爲春陽白雪國中屬而和者數十人其唱彌高其和彌寡とあるに本づき賈至舍人が詩を褒めたのである。

**義解** 鶏が紫陌に鳴くころ參内すると東天には曙光も見えず曉氣いと寒いことであるが鶯が皇州に囀るる聲を聞くと春も既に闌であることがわかるさて金闕の曉鐘が鳴り渡ると禁裡の千門萬戸は一齊に押し開かれるやがて千官が朝參すると玉階の兵仗は左右にならんで擁護することである又宮殿の花が千官の劍佩を迎へる頃は星も初めて落ち夜は漸く明け放れ青鎖門頭の柳は千官儀衛の旌旗を拂つてもまだ日の光りを受けないから露は乾かずに宿つて居ることである大明宮に早朝して見る所は大抵此れ位であるがさきに鳳皇池上の客なる賈至舍人が示された詩は誠に春陽の一曲にも譬ふべき傑作であるから之れに和することは非常に六ヶ敷く恐らくは誰れも真似ることが出来ないと思はれる。

宣政殿退朝晚出左掖

杜甫

**題意** 宣政殿は含元殿の後に在つて天子は月の一日と十五日に此の殿に出御な

されたのである左掖は門下省で此の時杜甫は左拾遺であつた此の詩は杜甫が宣政殿を退朝したること晩方左掖を出て家に歸つたことを咏じ且つ自己の黽勉怠るなきの誠意を述べたのである。

天門日射黃金榜。春殿晴曛赤羽旗。宮艸菲菲承委珮。爐烟細細駐遊絲。雲近蓬萊常五色。雪殘鵝鵲亦多時。侍臣緩步歸青瑣。退食從容出每遲。

**字解** 黃金榜黃金で飾つてある扁額。春殿宣政殿のこと春は添へ字。晴曛晴れて長閑なること。赤羽旗朱雀の畫を描いてある旗。菲菲匂ひ薫る貌楚詞の注に菲菲猶勃々芳香貌とある。委珮珮玉が地に着き引きすること。雲五色五雲と同じ五言排律重經昭陵の詩を見よ。鵝鵲觀名三輔黃圖に建元中作鵝鵲觀於甘泉宮苑垣内とあり賈賓王が帝京篇にも複道斜通鵝鵲觀とある。退食退朝すること詩經の羔羊に退食自公委蛇委蛇となる。

**義解** 朝早く宣政殿に朝すると旭日は天門に懸けてある黄金の扁額を照して居るそれからいよゝ宣政殿に近づくと赤羽の旗は長閑なる春風に飜つて居る又



宣政殿の庭上を見ると、若草は菲々として萌え出で、それが千官の引きずる佩玉を承ける風情があり、殿上の御爐を見ると、香烟は細々として立ちのぼり、丁度遊絲が駐つた趣がある。又五色の雲は常に蓬萊殿のあたりに棚引き、鳩鵲觀の殘雪は疾くに消え失せ、春色將に闌である、さて侍臣なる我れは、此の瑞氣に満ちたる宣政殿を退き、緩歩して門下省に歸り、そこでまた遅く迄執務し、やがて從容として退食することであるが、かく勉強しても、まだ曠職の譏りがあるかと、そればかり懼れて居ることである。

紫宸殿退朝口號

杜甫

**題意** 紫宸殿は天子が常に御出なさる御殿である、此の詩は紫宸殿の朝儀が済んで退出するとき作つたのである。

戶外昭容紫袖垂。雙瞻御座引朝儀。香飄合殿春風轉。花覆千官淑景移。晝漏稀聞高閣報。天顏有喜近臣知。宮中每出歸東省。會送夔龍集鳳池。

**字解** 戶外、戸口、即ち廊下のこと。昭容、正二品の女官で、九嬪の一である、唐書后妃

傳序に、昭儀、昭容、昭媛、修儀、修容、修媛、充儀、充容、充媛、是爲九嬪とある、唐の制、天子坐朝の時は、女官が百官を引いて殿上に昇るを例としたので、段成式の酉陽雜俎に、今閣門有宮人垂帛引百僚とある。雙瞻、御座、宮女が既に天子を此の殿に案内してから、尙戶外に留まつて左右の兩列にならび、御座の定まるを見定め、百官を傳呼して入らしめるのである。引、引導の意、即ち案内すること。朝儀、朝廷の儀式。合殿、滿殿と同じ、御殿全體。淑、景春の長閑なる日光。晝漏、晝の時刻、夜漏に對して曰ふ。稀聞、紫宸殿は宮中最深の處であるから、晝漏は必ず外廷の高閣より知らせることになつて居る、故にかくいふたのである。東省、門下省のこと、宣政殿の東に在るか、東省といふ、杜甫は當時左拾遺の官であつた。高閣、外廷の役所。夔龍、舜帝の二臣の名、書經舜典に、伯拜稽首讓于夔龍とある、こゝは借りて唐の宰相を指す。鳳池、中書省、七律賈至の詩を見よ、唐の制、大臣宰相が政事を集議する所は中書省である、而して拾遺門下の諸僚は、皆此の大臣宰相に隨つて朝見するのが例である、故に朝散じて後は、又之を送つて中書省迄行かねばならぬので、こゝに會送夔龍集鳳池といふたのは、即ち此の理由である。

**義解**

紫の袖を垂れて戶外に立つて居る女官は、御座の定まるを見、百官を案内し



て朝儀を爲さしめることである。この時殿上には、御爐の香が春風に飄つて全殿に充滿し、階下には、庭前の花が、淑景に映じて千官を掩覆して居る。又紫宸殿は宮中最奥の所であるから、晝漏を聞くことが稀れで、必ず外廷の高閣から知らせることになつて居る。又正殿の朝見は嚴正を旨とするから、外廷の臣僚は天顔を正視することが出来ない。故に天顔に喜びがあれば、只近侍の臣が便殿朝拜の時始めて知るのみである。我れは幸に拾遺の官を辱ふし、侍臣の席末に列し、天顔の喜びを拜することの出来るのは、誠に難有いことである。さて又我れは宮中の朝儀を終つてからは、いつでも同省の諸僚と共に、宰相を中書省迄送り、それから我が役所なる東省に行き、執務することである。

登樓

杜甫

**題意** 初め代宗の廣徳元年十月に、吐蕃の兵が長安に逼り、遂に京師を陥れたから、代宗は難を陝西に避けた。後郭子儀が長安を回復した爲めに、還京することが出来たが、吐蕃の勢は猶猖獗を極め、一方には又蜀邊を侵擾して、彼の松、維、保、三城の成を陥れた。此の時杜甫は蜀地成都の僻陬に居つた爲め、此の騷動を翌年の春に至つて始めて聞き、大に唐室の不幸を慨嘆したのである。此の詩は其の騷動を聞いてから、

成都の城樓に登つて作つたので、亂離の正に極なるに當つて、世に諸葛孔明その人を出さんことを望み、身は蜀地に在つても、心は嘗て朝廷を忘れぬことを述べたのである。成都は今四川省成都府成都縣治に屬し、吐蕃は西北方の蠻族である。

花<sup>ハ</sup>近<sup>ニ</sup>高樓<sup>ヲ</sup>傷<sup>ム</sup>客心<sup>ヲ</sup>。 萬方多難此登臨。 錦江春色來天地。 玉壘浮雲變古今。 北極朝廷終不改。 西山寇盜莫相侵。 可憐後主還祠廟。 日暮聊爲梁甫吟。

**字解** 客心、旅心と同じ。杜甫は當時に蜀に客と爲つて居た。萬方、諸方と同じ。錦江、七古短歌行の中に見えた錦水と同じ。玉壘山の名、四川省成都府灌縣の西北二十九里にある。北極、朝廷、長安を指す。西山、寇盜、蜀の西山を犯す叛賊といふ意で、即ち吐蕃のこと。後主、蜀の先主劉備(昭烈帝)の子である。蜀志に、後主諱禪。先主子也。景耀六年、魏命征西將軍鄧艾等數道並攻。後主降於艾。魏封爲安樂公とある。祠、廟、御靈屋、蜀の先主の廟は、成都の南に在つて、そこには後主劉禪も附祀されてある。梁甫吟、諸葛亮が隴畝に居つて、まだ草廬を出ぬ時に愛誦した詩の名である。蜀志諸葛亮傳に、躬耕隴畝、好爲梁父吟とある。此の義については種々説があるが、要するに臆



説で、今日からは詳しいことは分らない。

**義解** 高樓に登つて見ると近くには麗しい花が爛漫として咲き亂れ、得もいはれぬ景色であるから、我が心を喜ばせ、我が目を樂ませる筈であるのに、却つて我が客心を傷ましめるのは如何なる故であるかといへば、今や天下萬方が多難で、兵亂頻りに起り、身は此の僻地に客居し、寂しく獨り此の樓に登臨したからである。さて錦江のあたりは、春色天地に來り、昔に替らぬ春であるが、玉壘山の浮雲は、古今その態が變つて居、我をして轉々我が唐室の多難を愁へさせることである。聞けば、吐蕃は長安に迫り、京師を陥れたといふことであるが、元來我が唐室は、兵亂に遇ふたといへ、彼の錦江の春の如く、帝統自ら常徳があつて、終に改まることか無いのである。然るに吐蕃は此の理を知らず、まだ我が西山に寇して居るといふが、汝吐蕃等は、到底我が都を奪ふことは出來ぬことであるから、相侵さずに、速に歸服して王澤に浴するがよい、思へば昔し蜀の後主は、亡國可憐の君であつたけれども、猶祠廟があるのは、漢室の正統であつたからである。亡國の君でも、正統であれば、祠廟があること後主の通りであるから、堂々たる我が唐室に於ては尙更らのことで、彼の吐蕃などが、猥りに犯すことの出來るもので無い、たが今の時に諸葛亮の如き社稷の臣を得

たならば、吐蕃の撲滅はいふ迄も無く、唐室の中興は火を見るより明かであるから、我は日暮諸葛亮が愛誦した梁甫吟を爲し、切に諸葛亮その人の如き英傑の出るのを望んで居ることである。

秋興

杜甫

**題意** 秋興とは、秋色を見て感興を述べるといふ意である。此の時杜甫は蜀の夔州に流寓し、舟を舣して將さに峽を出でんとした、たま／＼秋色の蕭條たるを見て身の寥落を感じ、遂に家國の蒼茫を思ひ、此の詩を作つたので、時は大曆元年秋のことである。元來此の題は八首であるのを、唐詩選には四首だけ載せてある、今又その内の二首だけを講ずることにした。

玉露凋傷楓樹林。 巫山巫峽氣蕭森。 江間波浪兼天湧。 塞上風雲接地陰。 叢菊兩開他日淚。 孤舟一繫故園心。 寒衣處處催刀尺。 白帝城高急暮砧。

**字解** 玉露、玉の如き露、呂氏春秋に、宰揭之露、其色如玉とあるに本づく。楓樹、紅葉の林、阮籍の詠懐に、淇淇長江水、上有楓樹林とある。巫山、巫峽、巫山は四川省夔州



府巫山縣にある山で、その下を江水が流れて居て、それを巫峽といふのである。尚七律高適の詩を見よ。蕭森秋色淋しきこと。塞上、夔州を指す、白帝城樓の詩にも、城高絶、塞樓とある。他、日往日と同じ。刀尺、共に裁縫の道具、郭泰璣が詩にも、衣工秉刀尺とある。白帝城七律高適の詩を見よ。

**義解** 今や玉露は既に降り、楓樹の林はだん／＼凋傷し、巫山巫峽は、秋氣蕭森として誠に物寂しいことである。特に峽間の江水は、波浪高く天と兼ふばかりに湧き上り、塞上の風雲は、充塞して普ねく陰り、天地は陰森として尤も愁慘の状を呈して居る。さて我れは去年の秋夔州に來り、叢菊の咲いて居るのを見、異郷で菊見をするこゝとよと、思はず涙を流したが、今年も又菊花の時節に會ひ、去年と同じく再び涙を流し、故國に居らぬことを嘆くことである。我れはかく故國を慕ふから、今しも東に下る爲めに孤舟を艤し、事を以てその孤舟を此の地に繋いで置ても、心は嘗て故國に繋がらぬことは無い、時しも秋の末であるから、處々の家では刀尺を催し、冬衣の仕立をして居る。特に白帝城のあたりでは、日暮に砧をうつ音が、高く忙しく聞えることである。嗚呼故國を慕ふ身で、彼の江間愁慘の風光に接し、刀尺暮砧の有様を見聞したならば、誰れか斷腸の思ひが無からうか、思へば羈旅の身程、つらいものは無い。

三

**題意** 前詩は専ら羈旅の身を傷む意を述べたのであるが、此の詩は長安の宮闕を思ひ、久しく朝儀に列せざりしことを嘆じたのである。

蓬萊宮闕對南山。承露金莖霄漢間。西望瑤池降王母。東來紫氣滿函關。雲移雉尾開宮扇。日繞龍鱗識聖顏。一臥滄江驚歲晚。幾回青瑣點朝班。

**字解** 蓬萊宮闕、大明宮のこと。承露、金莖、七古長安古意漢帝、金莖の條を見よ、但し金莖は漢代のもので、唐の時には實際あつたのでは無く、こゝでは只借りて宮闕の盛を形容したまでである。瑤池、降、王母、瑤池は崑崙の丘にある地名で、昔し周の穆王が、西王母といふ仙人と會飲したといふ所で、列子に、周穆王命、駕遠遊、升崑崙之丘、遂賓於西王母、觴於瑤池之上とある、但しこゝでは瑤池を以て溫泉宮に喩へ、王母を以て楊貴妃に喩へたのである。史に據つて見ると、玄宗は開元二十八年十月溫泉宮に幸し、高力士をして楊氏の女を壽邸に取り、度して女道士と爲し、太真と號して、内太真宮に住せしめた、それから天寶四載七月になつて、之を冊立して貴妃と爲し、進見



の目覩裳羽衣の曲を奏せしめたので、つまり此の句は、貴妃冊立の盛典を咏じたのである。瑤池を以て溫泉宮に喩へ、王母を以て貴妃に喩へるのは、唐人の恒例で、他の少陵が詩にも、惜哉瑤池、飲落日留、王母などの句がある。東來紫氣、滿函關、此の句は列仙傳に、老子西遊、函谷關、令尹喜先見、東來有紫氣、知真人、當過此とあるに本づく、即ち老子が函谷關を通りしとき、紫の雲氣が満ちたといふ故事を借り、玄宗が老子を配祀した盛儀に喩へたのである。さて唐室では何故に老子を配祀したかといへば、これには深い理由がある。元來唐の姓は李であるが、先祖は誰れであるか一向に分らない。そこで唐室では自家の尊嚴に關するといふので、種々と穿鑿した結果、老子の姓が李であるのを幸に、遂に老子から出たのであると爲し、老子に皇帝の諡號を贈り、厚く之が祭祀を營んだのである。傳説に依ると、唐の高祖の武德三年に、晋州の人吉善といふ者、羊角山に行きて白衣の老父を見た、その時老父が吉善に向つて、吾が爲めに唐の天子に語れ、吾は是れ老君にして、則ち汝が祖なり」と曰ふた。吉善之を高祖に奏したところが、高祖深く之を信じ、廟を其地に建てた。これが唐室で老子を崇祀した始である。次に高宗は乾封元年に岱岳に行幸し、其歸途親しく老君の廟に詣で、之を追尊して玄宗皇帝と曰ふた。これが老子に帝號を加へた始である。それか

ら玄宗の世には、愈よ老子を尊信し、老子道德經の文で、河上公の舊注は、時に不經に渉るものがあるといふので、玄宗親ら新に其注を作り、學者に校習させ、且つ天下の學官に令して之を朝廷の考試に用ゐさせた。又史記の列傳に、伯夷が第一にあるのを改めて、老莊申韓列傳を開卷第一に置かせ、諸州に詔して所在に玄宗皇帝の廟を建てさせた。唐書にも、天寶初、老子降於丹鳳門之通衢、告錫靈符、在尹喜故宅。上遣使、得之、乃置玄宗廟於天寧坊、追尊聖祖大道玄宗皇帝、仍詔州郡立紫極宮とある。以て如何に老子を尊崇したかを知ることが出来る。雉尾、雉の尾で造つた大きな羽團扇で、天子か歩くときに、後から差し翳すものである。儀衛志に、天子臨朝、有雉尾障扇四、小團雉尾扇四、方雉尾扇十二とある。又此の扇は般の高祖から起つたので、古今注に、商高宗有雉尾之祥、服章多用翟羽、故有雉尾扇とある。龍鱗、龍の鱗をしてある天子の服、即ち袞龍の衣。聖顏、天顏と同じ、天子の御顏。雲移、雉尾云々の二句は、杜甫が天寶の末三大禮の賦を獻じ、玄宗の旨に稱ひて拜謁仰せつけられた時のことを詠じたので、句中に深く之を榮として居ることが見えて居る。滄江、夔州を指す。青瑣門下省を指す、杜甫は嘗て拾遺の官を拜したことがあつたから、之を追懷していふたのである。



**義解** 長安の都には、蓬萊の宮闕が終南山に對し、巍然として高く聳へて居、金莖の承露盤は、天にも届きさうに、又屹然として中空に聳えて居る。今我れは、萬里の片田舎なる此の夔州でこれを思ふと、その壯觀はあり／＼と眼前にちらついて居ることである。又更らに當時を回想すると、瑤池に王母が降つた様に、楊貴妃が冊立した事や、函谷關に東來の紫氣が満ちて、玄宗皇帝を配祀したことなどは、共に前代未聞の盛典であつて、我れも當時都に居つたから、之を拜觀することが出来た。殊に我れは其頃三大禮の賦を獻じ、辱くも天子の旨に稱ひ、拜謁を仰せ付けられたことであつた。その時、天子が翳す雉尾扇に移つた雲は、さつと開いて、麗しい宮扇が俄かに現はれ、龍鱗の衣を召された聖顔を、瑞日繚繞の間に拜したので、當時の我れは恍として凌雲の想があつた。然るに今は滄江に一臥し、歳の將さに盡んとするに驚く有様である。思へば昔し肅宗皇帝の朝に、一たび拾遺の官を拜し、身を青瑣の班に列したが、幾何も無くして罷め、遂に流轉飄泊の人と爲つたので、實に今昔の感に堪へぬのである。

登高

杜甫

**題意**

此の詩は秋の日に高い處に登り、滿目の光風を見て感懷を述べたものである。

風急天高猿嘯哀。渚清沙白鳥飛迴。無邊落木蕭蕭下。不盡長江滾滾來。萬里悲秋常作客。百年多病獨登臺。艱難苦恨繁霜鬢。潦倒新停濁酒杯。

**字解**

無邊、どこもかしこもの意。落木、落葉。蕭蕭、物淋しき貌。滾滾、流れて止まぬ貌。百年、多病、生涯常に病氣であること。繁霜、鬢頭の毛が日増に繁く白くなつたこと。潦倒、痛く老衰せしこと。

**義解**

時は秋の末であるから、天は高くして氣清み、風は烈しくして音荒み、猿は物哀しい聲で嘯いて居る。又渚は清くして沙は白く、鳥はその間を飛び廻へつて居るのみならず山も峰も、木葉の落つる音が蕭々として聞え、盡きぬ長江の水は、滾々と流れて止まず、今更ながら秋は物憂きことを感じた。さて我れは萬里を隔て、客と爲つて居るから、此の物悲しい景色を眺むるについては、愁は一入増すばかりである。殊に百年多病の身で、一人の友も無く、獨り此の臺に登つたことであるから、悲惻はいよ／＼深く、實に感慨に堪へぬことである。別けて艱難にのみ出遇ふた



から、頭髮も日に増し白きを加へ、その上老衰した爲めに、新に濁酒さへ絶ち、杯を手  
に持つことが無いから、いよ／＼氣が晴れることも無く、幽愁の間空しく日を送る  
ばかりである。

闕下贈裴舍人

錢起

**題意** 闕下は輦下と同じ、裴舍人は裴夷直のことで、時に中書舍人であつた、此の詩  
は錢起が進士試験に及第しなかつた爲めに、之を作つて舍人に寄せ、引薦の意を漏  
したのである、題首に闕下の二字を冠したのは、呂氏春秋に身在江湖心繫魏闕之下  
とあるに本づき、我れは布衣の身であるが、心は常に禁裏に往來して居るから、是非  
御引立を願ふといふ意を諷したのである。

作者略傳

錢起字は仲文、吳郡の人、天寶中進士に擧げられ、官考功郎中に至つた、大  
曆十才子の第一人である。(紀元一四二六—一四三九  
西紀七六六—七七九)

二月黃鸝飛上林。春城紫禁曉陰陰。長樂鐘聲花外盡。龍池柳  
色雨中深。陽和不散窮途恨。宵漢長懸捧日心。獻賦十年猶未  
遇。羞將白髮對華簪。

字解

黃鸝鶯。上林上林苑のこと、七律王維の詩を見よ。春城紫禁、天子の御座る  
王城。長樂宮殿の名、史記淮陰侯傳に、呂后使武士斬韓信、長樂鐘室とあつて、注に長  
樂宮懸鐘之室とある、此の詩に長樂鐘聲とあるのは、此の故事に本づいたのである。  
龍池、此の池は唐の武后の時に始めて出來たのである、初め長安隆慶坊の南に、民家  
の廢井があつた、嘗て忽焉として湧て小池と爲り、周表十數畝に亘り、その中常に雲  
氣があつて散じない、或は黃龍が游泳して居るのを見たといふものさへあつた、そ  
れから其の水は益々浸廣して遂に一大池と爲り、村中の民は悉く其の居を移して  
仕舞つた、そこで望氣の者は説を立て、鬱々として帝王の氣があると爲した、それか  
ら中宗の神龍五年に、帝は舟を此の地に浮べ、群臣を宴してその氣を鎮壓し、號して  
龍池といふた、これが此の池の由來である。陽和、長閑に暖かなる氣候。窮途、困難。  
宵漢、朝廷に譬へていふ。捧日、心魏の程昱が故事、魏書に、程昱少時夢上泰山兩手捧  
日、昱以語荀彧、荀彧白曹操、操曰、卿當終爲吾腹心とある、即ち忠厚の心といふ意。未  
遇、用ゐられざること。華簪、貴人が飾に用ゐる麗しき簪で、つまり顯榮の官に譬へ  
たのである。

義解

春も二月の盛りであるから、鶯は上林苑に飛んで囀り、春城の紫禁は花曇り



で、曉の空には霞霞が陰々として立ち籠めて居る、又長樂宮で撞き鳴らす曉の鐘は、  
ゴーンといふ聲を残して花樹の外に至つて盡き龍池にある柳の色は、恰も雨中に  
在る如く、緑の色はいよ／＼深く見える、さてかく陽和の時節であるから、少しは愁  
が散ずる筈であるのに、我れは我が窮途の恨を散ずることが出来ず、空しく霄漢を  
望み、捧日の忠誠を抱いて泣いて居るばかりである、願れば、我れは賦を献じて天覽  
に供へてから既に十年になるが、まだ御採用も無く、御覽の通り碌々として下流に  
沈淪して居るので、此の白髪頭を以て舍人が得意の華簪に對することは、如何にも  
耻かしいことである、願くは舍人よ、少しく憐察を垂れ、何分にも引き立て、貫ひた  
い。

自鞏洛入黄河即事寄府縣寮友

韋應物

題意

鞏洛は鞏縣の洛水である、鞏縣は唐の時は河南道河南府に屬し、今は河南省  
河南府鞏縣治に屬して居る、又洛水は河南省陝州盧氏縣から發し、東北に流れて洛  
陽縣の南に入り、渭水瀍水と合して又東に入り、偃師縣鞏縣を経て伊水と合し、遂に  
黄河に入るのである、府縣は即ち河南府鞏縣で、寮友は作者が嘗て河南府に官遊せ  
し時の同僚である、此の詩は、作者が鞏縣の洛水から、船を舩して黄河に入るとき、昔

しの同僚を思ひ、之を訪ねやうとしたが、忙しい旅で立ち寄ることが出来なかつた  
から、此の詩を作つて贈つたのである、即事とは即吟と同じく、景色を見て直ぐ作る  
ことである。

夾水蒼山路向東。東南山豁大流通。寒樹依微遠天外。夕陽明  
滅亂流中。孤村幾歲臨伊岸。一雁初晴下朔風。爲報洛橋遊宦  
侶。扁舟不繫與心同。

字解

豁、豁大、廣く大きいこと。依、微、かすかなること。明、滅、明くなつたり見えなく  
なつたりすること。幾、歲、吳本に歲の字を處に作つてあるが、處の方がよいやうに  
思ふ。伊、岸、伊水の岸、伊水は河南省陝州廬山縣熊耳山から發し、伊陽縣を経て洛湯  
縣の南に至り、又東北偃師縣を経て鞏縣に入り、洛水と合する河である。朔、風、北風。  
洛、橋、遊、宦、侶、今洛橋の邊に役人をして居る友。

義解

鞏縣の洛水は、青山が水を夾み、河幅も狭いが、そこを東に向つて漕ぎ行くと、  
連山始めて絶え、天地は豁然として廣くなり、いよ／＼黄河の本流に通すること  
ある、さて舟中から眺めると、冬の木立は依微として遠く天外に見え、夕日の影は、水



の流れに従つて明滅して居る、又伊水の邊には淋しき林があつて、それが岸に臨んで所々に建てられてある、折しも空は晴れ渡り、一雁が朔風に飛んで沙汀に下りたのもあつた、舟中で見るところはすべてかゝる景色である、今余は事を以て鞏縣に來り、此の洛水を下つたことであるが、何分忙しい旅であるから、舟を停めて洛橋に遊宦して居る諸君を訪ねることが出來ず、誠に残念なことである、故に此の詩を贈つて余が境遇を知らせるのであるが、余が遊宦不遇の心は、丁度繫がない扁舟の如く、漂泊は依然として變らぬことである、諸君の近況は如何ですか、ちと知らせてくれ玉へ。

登柳州城樓寄漳汀封連四州刺史

柳宗元

題意

柳州は今の廣西省柳州府柳城縣治に屬して居る、それから漳州は福建省漳州府龍溪縣治、汀州は福建省汀州府長汀縣治、封州は廣東省肇慶府封州縣治、連州は廣東省連州治に屬して居る、さて柳宗元が此の詩を作つたのは初め永貞元年に、柳宗元は韓泰、韓晔、劉禹錫、陳謙、凌準、程异、韋執誼と共に王叔文に黨した爲めに、一網に打盡せられて各州縣の司馬に貶せられた、時人は之を八司馬と稱して惜んだ、その後準と執誼とは貶所に卒し、程异は先づ召されて京師へ歸つた、それから元和十年

に、宗元等五人も幸に召還されたが、又事を以て斥逐せられ、宗元は柳州、韓泰は漳州、韓晔は汀州、陳謙は封州、劉禹錫は連州の刺史と爲つたのである、宗元既に柳州に到り、城樓に登つて觸目傷懷し、此の詩を作つて彼の四人に寄せたのである。

城上高樓接大荒。海天愁思正茫茫。驚風亂颭芙蓉水。密雨斜侵薜荔牆。嶺樹重遮千里目。江流曲似九迴腸。共來百粵文身地。猶自音書滯一鄉。

字解

大荒、吳都賦に出乎大荒之中とあつて注に大荒、謂海外也とある。茫茫、廣大の貌。驚風、凄まじき風。颭、說文に風吹浪動也とある。芙蓉、蓮のこと。薜荔、蔓草の名、蔦と同じ。九迴腸、司馬遷が報任安書に、腸一日而九迴とあるに本づく、愁の爲めに腸が一日に九回廻といふこと。百粵、粵は越と同じ、過秦論の注に、百越、非一種、若今言百蠻也とある。文身、地文身は身體に入れ墨をすること、越人は髪を斷ら身に入れ墨をするのが習慣で、劉向の説苑に、越亦天子之封也、不得冀竟之州、乃處海垂之際、而蛟龍又與我爭、是以剪髮文身、爛然成章、以象龍子者、將避水神也とある。一鄉、各一州を指す。



**義解** 我が居る柳州城の高樓に登つて見ると、海外の果迄續いて居、又南海の天は我が愁思の如く、正に茫々として際涯が無い、又凄じき風は、城池にある芙蓉を吹き動し、しつぱりと降る雨は、斜に風の爲めに、葛の垣に吹きつけられて居る、殊に嶺の樹は重り合ふて居て、我が千里の眼を遮り、爲めに君等の居らるゝ方も見ることが出来ず、江の流れは盤り曲つて居て、恰も一日に九廻する我が腸の様で、目に觸るゝもの、すべて愁思の種で、實に情に堪へぬことである、さて我れは諸君と共に、此の百粵の文身の地に來り、互に遠く相隔つて居る爲めに、手紙も一郷に滯つて思ふ様にならぬから、再び逢ふて閑談することなどは、逆も出来ない、思へば思ふ程悲しいことである。

奉和庫部盧四兄曹長元日朝廻

韓愈

**題意** 庫部は唐書百官表に、庫部郎中員外郎各一人、掌戎器鹵簿儀仗とある、即ち兵部の屬官で、武器を預り供奉のことを掌る官である、盧四兄盧は姓名は未考へず四は輩行なり兄は敬稱曹長は同官相呼ぶの稱で、此の時韓愈は比部郎中であつたからかくいふたのである、此の詩は庫部郎中員外郎盧某が元日に參賀の禮を終へて歸り、詩を作つて韓愈に見せたから、韓愈は之を作つて和したのである。

**作者略傳**

韓愈字は退之、自ら昌黎と號した、鄧州南陽の人で、代宗の大曆三年に生れた、幼にして孤、嫂に養育せられ、貞元八年年二十五を以て進士に及第し、九年より十一年に至り、博學宏辭を以て三度吏部に試みられたが、皆落第した、そこで三たび書を當路に上つて哀請したが、とり合はれないので、已むを得ず都を去つて郷に歸つた、同十八年に至り、宣武節度使董晉の推官となり、晋卒して武寧節度使張建封の推官となつた、十八年四門博士に調せられ、翌年監察御史に遷り、上疏して宮市を論して、德宗の怒りに觸れ、陽山の令に貶せられた、元和の初、復召されて國士博士に拜せられ、都官員外郎、河東令、比部郎中、史館修撰、太子右庶子、刑部侍郎に歴官した、元和十四年、憲宗が佛骨を迎ふるを極諫して逆鱗に觸れ、潮州刺史に貶せられた、翌年正月、穆宗位に即き、九月召還されて國子祭酒に拜せられ、尋いで兵吏二部の侍郎から京兆尹兼御史太夫と爲り、長慶四年(紀元一四八四)十二月二日を以て卒した、年五十七、禮部尚書を贈り、文と諡した、愈は資性硬直で、權貴に阿らず、平素人と交るに正直で、始終少しも變らなかつた、常に自ら孟軻に比し、佛老異端を闢くを以て自ら任し、又能く孤を郵み舊に篤く、好んで後進を誘導したから、門下の士で名を成したものが多く出た、當時文は魏晉の餘弊を承け、對偶に拘はり、文體日に衰へたのを、愈は古



文を唱道して之を古に返した、又詩は雅頌を本とし、學問才力を以て之を鍊り、風骨峻嶒李杜以後一派を開立したから、學者は仰いで泰山北斗と爲した。

天仗宵嚴建羽旄。春雲送色曉鷄號。金爐香動螭頭暗。玉佩聲來雉尾高。戎服上趨承北極。儒冠列侍映東曹。太平時節身難遇。郎署何須笑二毛。

字解

天仗、天子の儀仗で、即ち槍、戈、弓、箭の類。宵嚴、元日の朝會は大儀式であるから、前の晩から嚴に衛仗を用意して置く故にかくいふ。羽旄、鳥の羽で飾つた旗。送色、夜が明けんとするとき東方漸く白むこと。金爐、黄金で造つた香爐。螭頭、螭は龍に似て角が無い動物、昔し支那では、此の動物の頭の形を彫りて、殿階の欄干に飾り附けたので、漢書に、殿階欄楯刻螭爲飾。故丹墀上之階曰螭頭とある。雉尾、秋輿三を見よ。戎服、軍装したる武官。承北極、北極星の如く北に列ぶこと。儒冠、禮服を着けた文官。東曹、東に列ぶこと。郎署、役所。二毛、頭の髪が半ば白く半ば黒くして相交りたること。

義解

元旦の朝會は中々大儀式であるから、役人共は、前夜から天仗を備へ、羽旄を

押し立て、嚴重に番をして居る、かくて夜明け近くなると、東方の春雲は、漸く色を送つて麗はしく見えて來、曉鷄も亦一聲目出度鳴けば、いよ／＼元旦となつて朝儀が始まることである、此の時殿上の金爐には、御香の煙りが立ち上り居るが、欄階の螭頭は、まだほの暗くして分明に見えない、やがて玉佩の音がしづ／＼と聞え、雉尾扇が高く舉げられて天子が出御になると、戶外の昭容は御座の定まるを見て百官を引き、武官は趨りて地に列び、文官は東に列び、茲に恭しく拜禮することである、さて太平の時節はなか／＼遇はれぬものであるが、今此の聖明の時に遇ひて新年を迎へるのは、誠に幸福なことである、故に縦令郎署の下僚に居り、頭髮が二毛となつたとて、嘆嗟するには及ばぬことである。



五言絶句

題袁氏別業

賀知章

【題意】 此の詩は知章が袁氏の別荘に遊び、其林泉の景勝に感じて作つたのである。袁氏とは如何なる人であるか分らぬが、多分風流の人であらう。

主人不相識。偶坐爲林泉。莫謾愁沽酒。囊中自有錢。

【字解】 偶坐、相對して坐すること。沽、買ふこと。史記滑稽傳に、王先生懷錢沽酒とある。

【義解】 此所の主人袁氏は、如何なる人であるか、我は初めからその人の顔も識らないのである。然るに突然この別荘に來、主人と相對して坐するのは、林泉の景色が勝れて居るからである、それについても我は評判の酒飲みであるから、主人は我が此所に來た眞意を知らないで、酒を買はずばなるまいと、漫りに心配をして居られはすまいか、だが我が囊中には自ら酒を買ふ位の錢はあるから、此の様な事で主人に迷惑を懸けやしない、我が此所に來たのは、全く林泉の景を賞する爲めであると、囊

中自有錢の一句、一種の諧謔を帯び、知章が洒落なる性格と、林泉を好愛する風流とを想見することが出來、誠に面白い詩である。

夜送趙縱

楊炯

【題意】 此の詩は趙縱が舊府に歸るのを夜送つたのである。當時の慣例として、郡守は任滿つると京師に入りて超遷を待ち、若し超遷を得ぬ時は、再び其郡即ち舊府に還つたのである。今此の詩は趙氏連城の壁を引き、趙縱を慰めてある所から見ると、趙縱もまた郡守で上京したけれども、昇進することが出來ず、怏々として空しくその郡に還るのであると思はれる。

趙氏連城壁。由來天下傳。送君還舊府。明月滿前川。

【字解】 趙氏連城壁、趙の惠文王が持つて居た名玉で、秦の昭王が十五城と交換したといつたから、連城壁といつたのである。此の名玉は一度秦王に與へたが、趙王の臣藺相如が再び之を取り返したのである。史記藺相如傳に、趙惠文王時得楚和氏璧、秦昭王聞之、使人遺趙王書、願以十五城請易璧。趙王於是遂遣相如、璧西入秦。秦王坐章臺見相如、相如奉璧奏秦王。秦王大喜、傳以示美人及左右。左右皆呼萬歲。相如視秦王無意償趙城、乃前曰、璧有瑕、請示王。王授璧。相如因持璧却立、倚柱、怒髮上衝冠。相如



乃使<sub>レ</sub>其從者<sub>ヲ</sub>衣褐<sub>ヲ</sub>懷<sub>キ</sub>其璧<sub>ヲ</sub>從<sub>リ</sub>徑道<sub>ニ</sub>亡歸<sub>リ</sub>璧于趙<sub>ニ</sub>秦亦不以<sub>レ</sub>城予<sub>フ</sub>趙趙亦終不<sub>レ</sub>予<sub>フ</sub>秦璧<sub>ト</sub>ある。舊府もと勤めたる役所。

**義解** 趙氏連城の壁は稀代の名寶で、一度秦王に欺き取られたが、終に趙國に還ることが出來た、而してそれ由來は天下に傳はり、誰れ一人知らぬものは無い、さて趙君の才名も亦此の壁の様で、天下の人は皆知つて居る、故に今君が舊府に還るのは、丁度此の壁が國に還つた如く、その才の光りは必ず掩ひ難きものがあらう、果して今君を送つて行くと、皎々たる明月は前の川に満ちて居、恰も君の才名が天下に輝いて居ることを現はして居る様である、されば君よ、假令不遇であつたとて、左迄落膽するには及ばぬことである。

易水送別

駱賓王

**題意** 易水は今直隸省順天府保定縣にある川で、昔し荆軻が風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還と歌ひ、血涙を呑んで燕の太子丹に別れた所である、今賓王は此の古跡に於て人と別れるに就き、此の詩を作つて送つたのである、而して送別の何人であるかは分らぬが、詩中故らに燕丹の故事を用ひ、作者自ら之に任じ、俠氣凜然として言外に見はるる所から見ると、多分徐敬業と別る、時の作であると思はれる。

敬業は兵を擧げて則天武后を討たんとし、賓王はその幕下に居て大に盡力したが、兵敗れて後は、二人とも終る所が分らなくなつたのである、詩意より見て、二人が此の古跡で手を別ち、賓王が此の一絶を以て送つたとするも、あながち無稽の説ではあるまいと思ふ。

此地別燕丹。壯士髮衝冠。昔時人已沒。今日水猶寒。

**字解** 此地別燕丹、壯士髮衝冠、此地は易水、燕丹は燕の太子丹、髮衝冠とは怒つて髪が皆立つことで、慷慨悲憤の態を形容した詞である、史記刺客傳に、燕太子丹質於秦、秦王之遇不<sub>レ</sub>善、故丹怨<sub>レ</sub>而亡歸、歸而求<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>報<sub>レ</sub>秦<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>者、(中)荆軻遂發<sub>レ</sub>太子、賓客知其事者皆白衣冠以送<sub>レ</sub>之、至<sub>レ</sub>易水之上、既<sub>レ</sub>祖<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>道、高漸離擊<sub>レ</sub>筑、荆軻和<sub>レ</sub>而歌、爲<sub>レ</sub>變徵之聲、士皆垂<sub>レ</sub>淚涕泣、又前<sub>レ</sub>而歌曰、風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不<sub>レ</sub>復還、復爲<sub>レ</sub>羽聲、愴慨、士皆瞋<sub>レ</sub>目、髮盡<sub>レ</sub>上指冠、於是<sub>レ</sub>荆軻就<sub>レ</sub>車<sub>レ</sub>而去、終已不<sub>レ</sub>顧<sub>レ</sub>とある。昔時、人は荆軻を指す。

**義解** 此の地は昔し荆軻が燕の太子丹に別れた所で、その時壯士荆軻は、愴慨の餘り、髮盡く上つて冠を衝いたといふことである、今やその荆軻は既に歿して跡方も無いが、易水の流だけは猶昔の如く依然として寒い、さても我等は今此の易水で別れるに就いても、荆軻の昔が忍ばれ、轉、悲憤の情に勝へぬことである。



贈喬侍御

陳子昂

**題意** 此の詩は喬侍御に贈つて當時の昇平の世文武弛懈の弊を痛言し、且つ侍御が不遇を悲んだのである。喬は如何なる人であるかその事跡は分らぬが、詩意より考ふると、功を邊塞に立てたけれども、其官の侍御に止まり、餘り榮達しなかつた人と見える。侍御は侍御史で、既に七言古長安古意に説いてある。

漢庭榮巧宦。雲閣薄邊功。可憐驄馬使。白首爲誰雄。

**字解** 漢庭漢の朝廷、借りて唐朝を諷す。巧宦上に諂い巧に立身を謀る便佞の徒。雲閣漢の凌雲閣、明帝の時功臣を凌雲閣に書き、後世の紀念とした。邊功邊塞に在りて立てた功。驄馬使後漢の桓典が故事、後漢書桓典傳に、桓典爲侍御史。宦官畏之。典常乘驄馬。京師爲之語曰、行々且止避驄馬御史とある。こゝでは借りて喬侍御を指す。驄馬は七言古高都護驄馬行の詩に説いてある。白首白髮の頭。

**義解** 今の世は、才器の無い者でも、上官に取り入ることが上手であると、ずん／＼と昇進するが、上官に取り入ることの下手な者は、縦令邊塞で勳功を立てた俊傑でも、下流に沈淪して雲閣に書かれもしない、誠に浩嘆に勝へぬ、さて足下は昔しの桓典の如き硬骨の臣で、頭の毛が白くなつた今日でも、壯心猶未だ衰へないことは、喜ぶべきことであるが、然し足下は誰れの爲めにかく雄健なることであるか、之を以て今日用ゐられんことを望むは、丁度黄河の清を待つと同じことであるから、余は寧ろ足下の爲めに傷むことである。

南樓望

盧僎

**題意** 南樓は今の四川省保寧府城の南に在つたので、大明一統志に、據江山之會、唐滕王元嬰建とある、此の詩は此の樓に登臨して、客懷を述べたのである。

**作者略傳** 盧僎は字號鄉貫ともに明でないが、中宗の時の人で、(紀元一三六五)開喜尉より入りて學士と爲り、吏部員外郎に終つた。

去國三巴遠。登樓萬里春。傷心江上客。不是故鄉人。

**字解** 去國國は都の長安を指す。三巴今の四川省保寧府にある地名で、巴江の流域にある。

**義解** 我は長安を去つて遠く三巴に客となつて居るが、今此の南樓に登つて望むと、萬里皆春で、山は青く水は碧で、實によい景色である、然し巴江の上を通る人は、皆見も知らぬ人ばかりであるから、我はいよ／＼客心を傷ましめることである。



汾上驚秋

蘇頌

二四六

**題意** 汾上とは汾水の邊の意である。汾水は今山西省大原府陽曲縣の西より流れて同省平陽府洪洞縣に入る川で、昔漢の武帝が樓船を浮べて秋風辭を作つた處である。此の詩は此の川に遊び、木葉凋落して秋氣人を襲ふに驚き、之を作つて懷を述べたのである。

北風吹白雲。萬里渡河汾。心緒逢搖落。秋聲不可聞。

**字解** 北風吹白雲、武常の秋風辭に、秋風起兮白雲飛とあるに本づく、北風は秋風の意。渡河汾、河汾は汾河と同じ、秋風辭に、泛樓船兮濟汾河とあるに本づく。心緒心の思緒の如く、種々思ひ亂るゝこと。搖落、木の葉が散ること、秋風辭に、草木黃落兮雁南歸とあるに本づく。不可聞、聞くに堪ふ可からずの意。

**義解** 今や秋風が吹き廻つて白雲が飛び散つて居る、此の物淋しい時に、我は獨り萬里の旅に在つて、汾河を渡つたことである、さて絲を亂した如く愁のある我身は、この萬木の搖落の時に逢ふのであるから、蕭瑟たるその秋聲は、誠に聞くに堪へられぬことである。

蜀道後期

張說

**題意** 此の詩は都から出て蜀に使した時、豫定の歸期に後れたことを述べたので、妙は我れの歸期に後れたのは、秋風が我を待つて居ない爲であると、答を秋風に歸し讀む者に、期に後れて歸つたのは洵に奈何ともすべからざることであるといふことを悟らせる所に在るのである。

客心爭日月。來往預期程。秋風不相待。先至洛陽城。

**字解** 客心、旅に在る時の心。秋風、不相待、秋風は西から吹いて來る、而して今張說もまた西の方蜀から洛に歸るので、つまり同じ方から來るのである、然るに無情なる秋風は我を待つて居て呉れないで、獨り先に往つたといふ意である。

**義解** 彼の日月は常に運行して曾て休んだことが無い、そこで我れは此度蜀に使に往つても、また此の日月と行を争ひ、來往皆豫定の期日を趁ひ、少しも懈らなかつた、然るに無情なる彼の秋風は、我を待つて居て呉れないで、我れより先に洛陽城に吹き入つたことである、それであるから我れは豫期に後れ、秋になつて歸着した次第で、是は實に致し方の無いことである。



張九齡

照鏡見白髮

題意

此の詩は作者が官を罷めてから後の作で、身の不遇を嘆じたのである。

宿昔青雲志。

蹉跎白髮年。

誰知明鏡裏。

形影自相憐。

字解

宿昔往年。青雲志官に就いて立身したいと思ふ心、史記伯夷列傳に、閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施于後世哉とあり、范曄傳にも、須賈、不意君能

自致於青雲之上とある。蹉跎足を失ふ貌で、即ち途中で失敗すること。

義解

我れは往年青雲の志を抱き、國家の大臣とも成つて君國に忠誠を盡くさうと思つたが、世の中の事は意の如くならず、兎角蹉跎のみ打續いて、遂に白髮の老人

と成つて仕舞ふた、一日鏡に對して自分の姿を見ると、如何にも衰へて居るが、然し誰も我が此の面影を見て氣の毒に思ふてくれる者も無く、只明鏡に寫つた我が形と影とが、互に相憐むのみで、誠に心細いことである。

靜夜思

李白

題意

此の詩は靜夜獨居のとき、故郷を思ひ出して作つたのである。

牀前看月光。

疑是地上霜。

舉頭望山月。

低頭思故郷。

義解

靜夜獨り寢床に在つて前面を見ると、月の光りで庭中一面眞白になつて居

た、然し我はそれが月の光とは知らないで、之は大方霜であらうと疑ふたが、どうも霜で無い様であるから、頭を擧げてよく見ると、果して山の上に明月がかゝつて居た、さてその明月はいたく我が旅の懷を動し、我は俄に頭を低れて故郷を思ひ出し、夜もすがら睡られなかつたことである。

秋浦歌

李白

題意

秋浦は地名、古しへの宣城郡で、今は安徽省池州府貴池縣治に屬して居る、李

白は久しく宣城に客となり、秋浦歌十七首を作つた、これはその第十五首で、異郷に在りて年老いたるを慨したのである。

白髮三千丈。

緣愁似個長。

不知明鏡裏。

何處得秋霜。

字解

三千丈長いことを形容した辭。似個斯くの如しと同じ。秋霜頭髮の白い

ことに譬ふ。

義解

今明鏡に照して見ると、我が白髮は三千丈もあるが、是れは我が身に無限の

愁があるから、斯く長くなつたのである、だが霜の様な白い髮は何時何處から得たのであるか、自分でも不思議に思ふ位で、本當に我が髮とは思へないと、鏡中の影我



で無いと疑ふた所に面白味がある。

獨坐敬亭山

李白

**題意** 敬亭山は今の安徽省寧國府宣城縣の南七十里にある山で一に昭亭山といふ高さ數百丈で、東は宛句二水に臨み、南は城圍に俯し、千巖萬壑、近郭の名勝である。此の詩は敬亭山の風景を眺めて作つたのである。

衆鳥高飛盡。孤雲獨去閒。相看兩不厭。只有敬亭山。

**義解** 今迄は向ふに鳥も多く遊んで居、雲もあちこちに有つたが、此處に座つて見て居る間に、その衆鳥は高く飛び盡し、孤雲は閑に飛び去り、天地は淋しくなつて仕舞つた、只飛ばす去らず我と相見て相厭はざるは、獨り此の敬亭山のみでその悠然として動かない處は、確に我を厭はない證據で、我は之に對して誠に楽しいことである。

鹿柴

王維

**題意** 此の詩は王維が輞川の別業二十題中の一である。輞川は今の陝西省西安府藍田縣治に屬して居る、本集に、維別墅在輞川地、奇勝有孟城坳、華子崗、鹿柴、欽湖、柳浪、竹里館、辛夷塢等、與裴迪遊其中、賦詩相酬、各二十絕句とあつて、餘程景勝に富んで居

たと見える、鹿柴の柴は砦で、鹿を飼つて置く圍の柵である、然し此の詩は題面に拘泥せず、その近傍の景を寫したのである。

空山不見人。但聞人語響。返景入深林。復照青苔上。

**字解** 空山、淋しき山。返景は夕やけ、山海經に、長留之山、其神白帝、主司反景とあつて、注に日西入、則反景東照とある。

**義解** 此處は人里を隔てた淋しき山の中であるから、一向人影が見えぬけれども、餘り深山で無いから、どこやら人語の反響が聞えることである、それから夕やけが樹木の間から漏れて、再び青い苔の上を照らす、工合などは、如何にも閑雅で、得もいはれぬ風情である。

竹里館

王維

**題意** 此の詩も亦輞川の別業二十題中の一である、竹里館とは竹林中にある亭の名である。

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。深林人不知。明月來相照。

**字解** 幽篁、奥深き竹林。長嘯、長く口笛を吹くこと、楚辭に臨深水而長嘯とある。

**義解** 我は獨り幽篁の中に坐し、或は琴を弾じたり、或は長嘯したりして楽しんで居



るが、此の深林の趣は、誰れも知る者が無い、唯天上の明月のみは之を知るが如く、來り照してくるから、我は月と共に、樂しく此の仙境に逍遙して居ることである。

送朱大入秦

孟浩然

【題意】 朱は姓で、大は從弟或は再從弟中で、第一の年長者のことに用ふ、此の詩は朱大が五陵に行くのを送つたのである、五陵は長安に在つて、長安は古へ秦の地であるから、かく入秦といふのである。

遊人五陵去。寶劍直千金。分手脫相贈。平生一片心。

【字解】 遊人、朱大を指す。

【義解】 君は今五陵の地へ行かんとして居るから、予は饒別に千金の直ある寶劍を、腰から脱して君に贈ることである、是れは平生君と親しくした予が一片の赤心を、あらはす迄であつて、決して之れで情を盡したといふわけでは無い。

春曉

孟浩然

【題意】 此の詩は春の長閑なるを咏じ、其更け行くのを惜んだのである。

春眠不覺曉。處處聞啼鳥。夜來風雨聲。花落知多少。

【字解】 不覺曉、夜が明けたの知らないこと。夜來、昨夜よりの意。多少、多いか少

いか明瞭しないこと。

【義解】 春は寝心がよいから、夜が明けたのも知らないで眠つて居、はては處々で啼く鳥の聲を聞いて始めて目を覺したことである、思へば昨夜より風雨の聲がしたから、定めて懐かしい花も、大分落ちたのであらうが、さても惜いことである。

關山月

儲光義

【題意】 關山月とは歌曲の名である、此の詩は邊塞にある征夫の情を寫したのである。

作者略傳

儲光義は兗州の人、天寶の末（紀元一四一五）監察御史と爲り、後安祿山が

僞官に坐して貶死した。

一 雁過連營。繁霜覆古城。胡笳在何處。半夜起邊聲。

【字解】 繁霜、澤山に降る霜。半夜、夜半と同じ。邊聲、邊塞の聲で即ち胡笳のこと。

【義解】 建て連ねてある陣營の上を、一群の雁が啼いて過ぎ渡り、徐ろに秋の深いのを思はせ、又古城の瓦には、霜が繁く覆ふて眞白になつて居、邊塞愁慘の景、實に堪へられない、此の時何處とも知らず胡人が笳を吹いて、夜半に邊聲を聞いたことである、さて只さへ物悲しき秋であるに、又此の聞き慣れぬ胡笳を聞かされては、いよ



斷腸の思がする。

答武陵田太守

王昌齡

**題意** 武陵は郡名、唐の時は山南道朗州であつたが、今は湖南省常德府武陵縣治に屬して居る。田は姓で、太守は郡の長である。此の詩は王昌齡が龍標尉となつて居たとき、田太守に好遇されたから、別れ去るとき之を作つて太守に答へたのである。

仗劍行千里。微軀敢一言。曾爲大梁客。不負信陵恩。

**字解** 仗劍、劍を持つ意。史記刺客傳に、聶政仗劍至韓とある。微軀、卑賤の身。大梁、戰國の時の魏の都。史記魏世家に、魏徙治大梁とある。信陵、魏の公子信陵君のこと。史記信陵君傳に、公子爲人、仁而下士、士無賢不肖、皆謙而禮交之、不敢以其富貴驕士、士以此方數千里、爭往歸之、致食客三千人、とあつて、非常に士を好遇した人である。今田太守を以て此の信陵君に喩へたのである。

**義解** 我れ今劍を仗て千里の旅に赴くに就いては、微賤の身であるが、敢て一言申して置きたいことがある。予は古の大梁の客の如く、信陵君に比すべき足下から非常なる好遇を辱うしたことであるから、此の鴻恩は決して忘れず、いつか必ず報いたひと思つて居る。故に今別れに臨んで特に之を申し上げて置くことである。

絶句

杜甫

**題意** 杜甫の集には、絶句といふ題が澤山ある。これは格別題を設くる迄も無いから、かく題したのである。此の詩は旅中客懷を述べたのである。

江碧鳥逾白。山青花欲然。今春看又過。何日是歸年。

**字解** 然、燃と同じ、花の紅を形容したのである。

**義解** 川の流に白い鳥が浮んで居るが、水の色が碧である。丈、その鳥はいよ／＼と白く見え、又山がいよ／＼と青いから、花もいよ／＼と赤く、恰も火が燃え立つ様に見える。春色正に闌である。さて我は久しく他郷に客と爲り、今年もまた此の春を徒に眺め過すのみで、故郷に歸へられず、又何時歸へることが出来るやら、それも分らないことであるが、此の春色を戀しい故郷で見たならば、さぞ楽しいことであらう。

詠史

高適

**題意** 詠史とは歴史上の事實を詠じて之に論斷を下すものである。それで此の詩は即ち范睢須賈の事を詠じたのである。史記范睢蔡澤傳に、范睢者魏人也。字叔。事魏中大夫須賈。須賈爲魏昭王使於齊。范睢從。留數月。未得報。齊襄王聞睢辯口。乃使人賜睢金十斤及牛酒。睢辭不敢受。須賈知之。大怒。以爲睢持魏國陰事告齊。故得此饋。令睢受。



其牛酒還其金既歸心怒以告魏相魏相魏之諸公子曰魏齊魏齊大怒使人答擊唯折  
脅摺齒唯伴死(略中)遂得出(略中)更姓名曰張祿(略中)入秦(略中)秦封范雎以應號為應侯范雎既相  
秦而魏不知以為范雎已死久矣魏聞秦且東伐韓魏魏使須賈於秦范雎聞之為微行敝  
衣間步之邸見須賈須賈見之而驚曰范叔固無恙乎范雎曰然(略中)須賈曰今叔何中范雎  
曰臣為人庸賈須賈意哀之留與坐飲食曰范叔一寒如此哉乃取其一綈袍以賜之(略中)唯  
取大車駟馬為須賈御之入秦相府(略中)謂須賈曰待我我為君先入通相君須賈待門下持  
車良久問門下曰范叔不出何也門下曰無范叔須賈曰鄉者與我載而入者門下曰乃  
吾相張君也須賈大驚自知見賈乃肉袒膝行因門下人謝罪(略中)范雎曰汝罪有三耳(略中)然  
所以得無死者以綈袍戀々有故人之意故釋公とある。

尚有綈袍贈。應憐范叔寒。不知天下士。猶作布衣看。

**字解** 尚、須賈の范雎に於ける、初めは仇讎であつたが、その一寒を憐んで綈袍を贈つた事は、感心すべきことであるから尚と云ふたので、憐まなくともよいのに尚能く之を憐んだことを褒めた辭でソレデモマダの義である。綈、線入の着物。猶、當時范雎は已に秦の宰相と爲つて居た然るに須賈は之を知らないで、猶布衣貧賤の范叔と思つたのは、天下の士を見るの明が無い者であるから猶といふたのである、此の字はヤハリの義で、須賈が人を知る明なきを譏つた辭である。布衣粗服を着て居る無位無官の平民。

**義解** 須賈は范叔がわざと貧乏な風をして居たのを見て、以前の仇讎を忘れ、尚は綈袍を贈つて深く之を憐んだことは、誠に感心すべきことである、だが范雎は天下の士で、この時既に秦の宰相となつて居たことを知らず、やはり布衣の范叔だと思つて居たのは、實に馬鹿なことで、須賈は平凡の人であるといふ譏は、遂に免かることが出来ぬことである。

行軍九日思長安故園

岑 參

**題意** 行軍は進軍すること、九日は九月九日で、即ち重陽の節、此の詩は岑參が行軍中に重陽の節に遇ひ、長安の故園を思ふて作つたのである。

強欲登高去。無人送酒來。遙憐故園菊。應傍戰場開。

**字解** 登高去、重陽の節に高きに登つて菊酒を飲むことは支那の風習で、此の事は次の送酒の故事と共に、七律崔署の詩に説いてある、登去とは登ること。戰場、長安を指す長安は天寶以來屢々亂れて戰場と爲つたからである。

**義解** 今日は重陽の佳節であるから、恒例に従ひ、無理にも高い所に登り、菊酒を飲



まうと思つたが、人の酒を送つて来る者が無い爲めに、残念ながら止めた、これはつまり行軍中であるからである、さて遙かに思ふに、故園の長安も、既に戰場となりて痛く踏み荒されたことであれば、菊なども定めし路傍に空しく咲いて居ることであらう、高きに登ることが出来ぬさへ悲しきにか、長安を思ふと、實に斷腸の感がある。

登鶴鵲樓

王之渙

**題意** 鶴鵲樓は今の山西省蒲州府城の西南の城上に在つたので、沈括が夢溪筆談に、鶴鵲樓三層前、瞻中條山下、瞰大河とある、即ち此の樓は景勝を以て名高い所で、此の詩は其大觀を詠じたのである。

**作者略傳** 王之渙は并州の人で、少うして俠氣が有つたが、中ごろ節を折つて書を讀み、玉昌齡高適等と相唱和した。

白日依山盡 黃河入海流 欲窮千里目 更上一層樓

**義解** 鶴鵲樓に登つて見ると、西には中條山眼下に在つて、遙かに日輪の没する際迄見え、東は黃河が脚底に在つて、直ちに海に入つて流るゝ所迄眺められ、東西數百里の勝景は、之を一眸の内に收むることが出来るのである、そこで予が賞心は尙止

まず千里の勝景を望まんと思ひ、更らに此の樓の一層高い三階に登つたことである、更らに一層高い所に上つて其見る所をいはず、却て人をしてその見る所を思はせるのが、此の詩の面白い所である。

終南望餘雪

祖詠

**題意** 此の詩は長安から終南山の餘雪を見たことを詠じたのである、餘雪は暮雪又は殘雪と同じ、此の詩は祖詠が應試の時の作で、下の如き佳話がある、元來應試には律律に作るべき筈であるのに、詠は只此の四句を以て出した、すると試験官は餘り短いつて咎めたから、詠は意盡きたりといつて之に答へ遂に及第したので、意盡きたりの一語は、詩學上千金の値がある。

終南陰嶺秀 積雪浮雲端 林表明霽色 城中增暮寒

**字解** 陰嶺長安からは終南山の北面が見える、故に陰嶺といふ、陰は北なり。暮寒春になつてもまだ寒いこと。

**義解** 終南山の北嶺は、巍然として高く聳え、その頂上には、雪が積んで消えず、ながら雲の端に浮んで居る様である、さて又此嶺の雪が消えないから、その林の表は豁然として明で、凜烈の景人に迫つて居る、故に長安城中は、その吹き下す風を受け



て、暮寒彌々増し、特に酷しいことである。

平蕃曲

劉長卿

**題意** 此の詩は唐の世で、胡を平げた凱旋の曲である。

渺渺成烟孤。茫茫寒艸枯。隴頭那用閉。萬里不防胡。

**字解** 成烟、屯成せる兵營の烟。孤、は少しの意。隴頭、隴山の邊、隴山の解は前に出づ。

**義解** 渺々たる塞上、成烟すでに少く、數百里の間、茫々として壘營の跡なく、只寒草が空しく枯れてあるのを見るばかりである。さて胡地はかく静謐であるから、隴山の邊にある諸關は、もう閉づるに及ばず、長城萬里、胡人を防ぐ憂へないので、誠に目出度いことである。

其二

絕漠大軍還。平沙獨戍閒。空留一片石。萬古在燕山。

**字解** 絕、漠、コビ沙漠を指す。燕山、大明一統志に燕然山、去塞三千餘里。後漢、竇憲大破北單于、登燕然山、命班固刻石勒功とある。

**義解** 既に胡兵を鎮定したから、我が軍は沙漠を横斷して都へ還り、平沙萬里多く

屯戍を設けず、胡地は至つて無事である。かくて燕山にある一片の石が、長く勳功を録して萬古に傳ふるので、華夷一統、誠に慶賀に堪へぬことである。

江行無題

錢起

**題意** 此の詩は作者が江に遊んだ時の作である。此の時詩多く成り、一々題名を附することが出来なかつたから、單に無題といふたのである。

咫尺愁風雨。匡廬不可登。祇疑雲霧窟。猶有六朝僧。

**字解** 咫尺、咫は八寸、尺は一尺、即ち極めて近い間のこと。匡廬、山の名で廬山のこと。昔し周の成王の時、匡裕先生といふ人此の山に住めり、故に一名匡廬ともいふたのである。猶、七律題、璿公山池の詩を見よ。六朝、僧、六朝は吳晉宋齊梁陳の六國で、僧は支遁、慧遠などの高僧を指す。慧遠が廬山に住んだことは、既に七律題、璿公山池の詩に述べてある。

**義解** 匡廬山は近く咫尺の間にあるから、直ぐ登らうと思ふたが、折しも山から雲烟が盛に起り、今にも風雨が來そうであつたから、残念だが遂に登らなかつた。しかし疑はしい事は、かの雲霧を吐き出す洞穴で、その中にはまだ六朝の高僧が住んで居るらしく思はれる。之を見るにつけても、我は最早世を捨て、此等の僧と伍し、静



に古道を尋ねたく思つた。

秋夜寄丘二十二員外

韋應物

題意

丘は姓で、二十二は一族從弟中二十二番目の年齢の人を稱する時に用ふ、員外は尚書六曹の屬官、此の詩は丘員外に與へて自分の胸中を知らせたのである。

懷君屬秋夜

散步咏涼天

山空松子落

幽人應未眠

字解

涼天、蕭條として淋しき空。山空、山靜にして淋しきこと。松子、和名松ボクリ、或は松カサといひ松の實を包んだ球形の殻。幽人、丘員外を指す。

義解

秋の夜、君を懷ひつゝ、獨り涼天の下に散歩したが、折しも山は靜で聲なく、只松子が落つる音が聞えるのみであつた、さて君の近況は如何であるか、定めてまだ眠らないで、我を憶つて居ることであらう。

秋日

耿 漳

題意

此の詩は秋日荒涼の景を見て感慨を述べたのである、特に殷の箕子が禾黍の故事を用ゐたので、其佇立彷徨、嗚咽歎の狀が、目に見る様である、箕子が禾黍の故事とは、史記宋世家に、箕子者紂親戚也、(略)武王乃封箕子於朝鮮、而不臣也、其後箕子朝周、過故殷虛、感宮室毀壞、生禾黍、箕子傷之、欲哭、則不可、欲泣、爲其近婦人、乃作麥

秀之詩、以歌詠之、其詩曰、麥秀漸々兮、禾黍油々、彼狡童兮、不與我好兮、所謂狡童者紂也、殷民間之、皆爲流涕とある。

作者略傳

耿漳字は洪源、河東の人、寶應二年(西紀元一四三)進士と爲り、左拾遺に終つた。

返照入閭巷

憂來誰共語

古道少人行

秋風動禾黍

字解

閭巷、邑里のこと、二十五家を閭といひ、その閭の中にある道を巷といふ。禾、黍禾は穀物の總稱で、黍は和名モチキビといふ。

義解

夕日が淋しく閭巷を照し、何ともいへぬ物悲しい光景である、我れは此の光景を見て、忽ち我が心の憂を催し來つたが、之を共に語るべき人も無く、獨り愁に沈んだことである、更らに村端れを見ると、荒れた道があるが、そこには往來する人も無く、只無情なる秋風が、禾黍を動かすばかりで、荒涼の感誠に堪へ難きことである。

和張僕射塞下曲

盧 綸

題意

此の詩は張僕射が作つた塞下曲に和して作つたのである、僕射は尚書の官、塞下曲は、既に五律李白の詩に説いてある。

作者略傳

盧綸字は允言、河中の人、大曆の初(西紀元七六六)進士に擧げられたが及

唐詩選釋

五言絕句 秋夜寄丘二十二員外 秋日 和張僕射塞下曲



第せなかつた、後監察御史に補せられ、檢校戸部郎中に遷つた、當時韓翃等十人と共に詩名があつたから、大曆の十才子と稱せられた、文宗皇帝尤も其詩を愛し、綸の歿後、中人を遣してその家箒を求め、五百餘篇を得たといふことである。

月黒雁飛高。單于遠遁逃。欲將輕騎逐。大雪滿弓刀。

**字解** 月、黒月が雲に覆はれて闇いこと、漢書匈奴傳に、匈奴舉事常隨月盛壯以攻戰、月虧則退兵とある。單于、匈奴の王。輕騎、舉措敏捷の騎兵。

**義解** 月は黒くして見え、雁は高く飛んで聲のみ遙に聞へる、此の夜單于の軍は大に敗れ、遠く遁逃した、そこで我が軍は輕騎を出して追撃したが、この時の勢は天に冲し、大雪が弓刀に滿つるのも知らなかつた程猛烈であつた。

三閭廟

戴叔倫

**題意** 三閭廟とは楚の屈原の廟のこと、此の詩は即ちその廟に詣で、屈原を弔つたのである、王逸が離騷の序に、屈原仕於懷王、爲三閭大夫とある、又史記屈原傳に、屈原者、名平、楚之同姓也、爲楚懷王左徒、上官大夫與之同列、爭寵而心害其能、因讒之、(略)中王怒而疏屈原、(略)中故憂愁幽思、而作離騷、(略)中頃襄王立、(略)中令尹子蘭使上官大夫短屈原於頃襄王、頃襄王怒而遷之、屈原至於江濱、被髮行吟、澤畔、(略)中乃作懷沙之賦、(略)中懷石遂投汨羅以死とある、三閭の職は、昭氏屈氏景氏の三王族の事を掌るので、丁度今の宗秩寮の如きものである、それで此の廟は、今の湖南省長沙府湘陰縣の北六十里汨羅江上に在つたので、一に汨羅廟ともいふ。

**作者略傳** 戴叔倫字は幼公、潤州の人、貞元中進士の第に上り、湖南に主運となつた、德宗の建中中(紀元一四四〇)撫州刺史より容管經略使に遷り、蠻落を綏徠し、頗る威名があつた。

沅湘流不盡。屈子怨何深。日暮秋風起。蕭蕭楓樹林。

**字解** 沅、湘、長沙府湘陰縣を流る、二水の名で、遂に汨羅江に流れ入る。怨、何、深、屈原に遇ひ千秋の怨を抱いで悶死す、故にかくいふ。

**義解** 屈原は萬斛の怨を呑んで死んだ人であるから、その怨は沅湘の水が萬古流れて盡ない如く、實に深く長いことである、まして日暮に秋風か吹き荒み、廟側の楓樹を動すのを見ると、蕭々として物凄く、如何にも怨を含んで居る様に思はれる。

登柳州鸞山

柳宗元

**題意** 此の詩は柳宗元が柳州の刺と爲つたとき、府城の西にある鸞山に登り、故郷の遠いのを嘆いて作つたのである、宗元は河東の人で、河東は今の山西省蒲州府永



濟縣治に屬して居、柳州は今の廣西省柳州府馬平縣治に屬して居るから、その間實に萬里の隔りがあるのである。

荒山秋日午。獨上意悠悠。如何望鄉處。西北是融州。

**字解** 荒山、鷺山を指す。時は秋にして鷺山は木葉凋落し、且つ人影稀にして淋しき山なる故かくいふたのである。悠悠、思の盡きざる貌。融州、柳州の北三十里に在る。

**義解** 秋の日の正午に、我は獨り荒山に登つたが、此の時に我が思ひは、悠々として盡きなかつた。そこで故郷を見たく思ひ、遙に西北の天を望んだけれども、故郷は見えないで、只融州のみが見えた。さても我が故郷はなせ見えぬのであらうか。柳州の山に登つて西北を望んだならば、融州を見て河東を見ることが出来ぬのは、分りきつたことである。然し此の詩の妙は此の分りきつたことをいふた所にあるので、靜に之を味ふと、柳宗元が故郷を慕ふ切なる心を、よく知ることが出来る。

### 七言絶句

蜀中九日

王勃

**題意** 此の詩は王勃が鬪鶏の檄を以て廢せられ、蜀に居つたとき作つたのである。舊注に、此詩以詩意按之、時有登臺置酒而送人者、而王亦與焉、然非爲送別而作也。故止題蜀中九日とある、即ち重陽の日、望郷臺に登り、客を送るとき作つたのであるが、送別を主に作つたのでないから、單に蜀中九日と題したのである。

九月九日望郷臺。他席他鄉送客杯。人情已厭南中苦。鴻雁那從北地來。

**字解** 望郷臺、成都の北に在つて隋の時蜀王秀が築いたのである。南中、蜀を指す。  
**義解** 九月九日は重陽の佳節で、高い所に登り菊花の酒を飲むのが例であるから、我も今望郷臺へ登つたことである。然るに酌む所の酒は、客を送る杯であるから、即ち我は他席他郷、客中客を送る次第で、實に悲しみに堪へぬことである。殊に我は此の蜀中に居るのが厭で、堪らぬのに、彼の鴻雁はなせわざ／＼北からこゝに來



るのであらうか、蜀中には少しも面白いことが無いのに飛んでくるのは、いよく解すべからざることであると、己が蜀中を厭ふ切なる心から鴻雁の北來を怪むところに無限の妙味がある。

涼州詞

王翰

**題意** 涼州は唐の時には隴右道に屬し、今は甘肅省に屬し、甘州の東に在る。此の詩は題して涼州詞とあるが、是れは涼州を詠じたのでは無い、凡そ地名を詞の題としたのは、大抵地方官が、その地の歌を採りて之を朝廷に進めたので、丁度萬葉集にある東歌上總國雜歌などと同じことでも、その地方の流行歌である。今此の涼州詞も、開元中西涼府の都督郭知運が採進したのが始まりである、それで王翰の此の詩は、只その題を借りて征戰の慘なることを詠じたのである、尤も詞中に、涼州の特産なる葡萄酒と、塞邊の音樂なる琵琶を詠じてあるから、此等も涼州詞と題した一因である。

作者略傳

王翰字は子羽、晉陽の人、少にして豪邁才を恃み、初め昌樂尉に調せられた、張説の政を輔くるに及び、召されて秘書正字となり、尋ぎて通事舍人に擢んでられ、開元中、駕部員外郎に任せられた、後汝州長史となつたが、事に坐して遣州司馬に

貶せられ、幾も無くして死んだ。

葡萄酒美酒夜光杯。欲飲琵琶馬上催。醉臥沙場君莫笑。古來征

戰幾人回。

字解

葡萄酒美酒美味なる葡萄酒の意、史記大宛列傳に、宛、左右以蒲陶爲酒、富人藏酒至萬餘石、久者數十歲不敗、俗嗜酒、馬嗜苜蓿、漢使取其實來、於是天子始種苜蓿、蒲陶肥饒地とあり、唐書にも、蒲桃酒西域有之、前代時有貢獻、及太宗破高昌、收馬乳蒲桃實於苑中、種之、并得其酒法、遂造酒成、綠色芳香酷烈、長安始知其味とある、以て此の酒が西域の特産であることがわかる。夜光杯杯の名で西域の名器、十州記に、周穆王時、西胡獻夜光常滿盃、盃是白玉之精、光明夜照、冥夕出杯於中庭、以向天、比明而水汁已滿于杯中、也とある。琵琶、西域の樂器、此の樂器は胡人が馬上にて彈するもので、釋名に、琵琶、本出於胡中、馬上所鼓也、推手向前曰琵琶、却手向後曰琵琶とある。沙場、塞外沙漠の地。君、汎く世人を指す。

義解

葡萄酒の美酒を夜光の玉杯に盛り、之を馬上で彈する琵琶を聞きながら飲んだが、餘り甘く且つ愉快であつたから、痛飲の極、遂に酔ひ倒れ、沙場に臥たことであ



る。さて君は我が此の狂態を笑つて下さるな。何せなれば昔しから此の地に戦争にきた人で、無事に生還した者は幾人あるか、多くは討死したり、病死したりするのである。今我も明日を知らぬ命であるから、大に飲んで英氣を養ひ、愉快に日を送りたから此の始末であると、悲壯淋漓、悲をいはいないで、悲に堪へぬ意が、言外に溢れて居る。

峨眉山月歌

李白

**題意** 此の詩は李白が赦に遇ひ、夜郎から還る時の作である。峨眉山は四川省嘉定府峨眉縣の西南にある山で、酈道元が水經注に、峨眉山、去成都千里。然秋日清澄、望見兩山、相峙如峨眉焉とある。又大明一統志には、山、來自岷山、連岡疊嶂、延袤三百餘里。至此突起二峯、其峰對峙、宛若峨眉とある。

峨眉山月半輪秋。影入平羌江水流。夜發清溪向三峽。思君不見下渝州。

**字解** 半輪、秋、半輪は弦月にて七八日頃の月、秋は觀月の好期であるから半輪秋は如何に美しき月であるかがわかる。平羌江、一に平羌水といふ、青衣江が雅州府雅

安縣から流れて嘉定府洪雅縣の南に入り、又東西に流れ、嘉定府の西を経て大渡河と合したところを平羌江といふのである。水經注に、青衣水、逕平郷、謂之平郷江。東逕峨眉山、又東流注於大江とあるは、即ち此の平羌江のことである。清溪、四川省資州内工縣の東北八十里にある。三峽、石洞峽、明月峽、温湯峽をいふ、江水中の名勝。渝州、唐の時は劍南道に屬し、今は四川省重慶府巴縣治に屬して居る。

**義解** 我れ始め清溪を出發した時は、麗しき峨眉山上に、半輪の秋月が輝き、それが平羌江に映り、激澗として水と共に流れて居るのを見た、それから舟が峽に向つたときは、此の秋月はまた望むことが出來ず、遂に渝州に下つたが、さても愉快な舟行であつた。

早發白帝城

李白

**題意** 此の詩は李白が白帝城を發して江陵に下つた時の作で、河流が矢の如く疾いことを詠じたのである。白帝城は七律秋興の詩に説いてある。

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。



**字解** 江、陵唐の時は山南道に屬し、今は湖北省荊州府江陵縣治に屬して居る、盛弘之の荊州記に、朝發白帝、暮宿江陵、凡一千二百餘里、雖飛雲迅鳥、不能過とある。萬重山、幾重にも重り合ふて居る山、荊州記に、峽長七百里、兩岸連山、略無絕處、重岩疊嶂、隱天蔽日、常有高猿長嘯とある。

**義解** 朝早く白帝城には麗しき雲がかゝつて居る頃、我は舟に乗り、江陵に向け白帝城を出發したが、白帝城から江陵迄は千里もあるけれども、僅かに一日で還り着いたことである、かく舟の馳ることが疾いから、江の兩岸で啼いて居る猿の聲が、まだ止まぬうちに、我が輕舟は既に萬重の山を通り越したので、その流れの疾いことは、實に驚くばかりである。

千二百里は六町一里としても、我が二百里である、此の二百里を一日で着くとすると、今新橋から出る早急行列車よりも疾いのである、支那一流の形容であるとしても、兎に角この急流なことは想像が出来る。

越中懷古

李白

**題意** 此の詩は越王勾踐の跡を弔つて作つたのである。なほ七古吳宮怨を見よ。

越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今唯

有鷓鴣飛

**字解** 破吳歸、越王勾踐が吳王夫差を滅したことは、史記吳世家、越世家、及び伍子胥列傳等に詳しく書いてある。義士、越王の爲めに忠義を盡した臣。鷓鴣、南方に居る鳥の名(シヤコ)、本草綱目に、鷓鴣形似母雞、頭如鶉、臆前有白圓點、如真珠、背毛有紫赤浪文、好啖半夏烏頭、苗故肉有微毒、性畏霜露、早晚稀出、夜栖以木葉蔽身、多對啼、云鈎輻格磔、今俗謂其鳴曰行不得哥也、其飛必南向、雖東西回翔、開翅之始、必先南翥、其志懷南不徂北也、其性好潔、獵人因以稿竿粘之、或用煤誘取、南人專炎食、肉白脆、味勝雞雉とある。

**義解** 昔し越王勾踐が吳を滅して凱旋した後は、年來の仇を取つたことであるから、義士皆恩賞に浴し、盡く錦衣を着て贅澤に暮し、殊に越王勾踐は、花の如き美人を春殿に集め、恣に長夜の飲をなし、驕奢を極めたことであつた、然るに今は如何であるか、榮華の跡は原野と變じ、只鷓鴣が淋しく飛んで居るばかりである。

從軍行

王昌齡

**題意** 從軍は樂府體である、此の詩は、征戍には大將その人を得るのが肝要であることを咏じたのである。



秦時明月漢時關。萬里長征人未還。但使龍城飛將在。不教胡馬度陰山。

**字解** 龍城、今の甘肅省鞏昌府岷州の東北にある。史記衛青傳に、擊匈奴出上谷(略)至龍城斬首虜數百とある。飛將は飛將軍のことで、漢の李廣を指す。史記李廣傳に、廣爲北平太守。匈奴號曰飛將軍。避之。數歲不敢入。右北平とある。陰山、七古崔五丈の詩を見よ。

**義解** 昔し秦の時に夷狄を征伐した事があつて、遠征の將士は邊塞に屯し、明月を見て泣いたことがあつたが、漢の時にも亦征討の事があつて、征夫は玉門關を過ぎ、悲んだのである。戎虜を征伐することは當代でも猶止まず、今や萬里の遠方へ出陣した人々は、まだ都へ還り来ないから、定めし明月を見て泣いて居ることであらう、さてかく征戎の事が打ち續くのは、畢竟名將が無いからである。若し古への飛將軍李廣の如き人があつて、龍城に駐つて居たならば、再び胡馬をして南に牧して、陰山を度らせる様なことは無からうと思ふ。

九月九日憶山東兄弟

王維

**題意** 此の詩は王維が十七歳の時他郷に寓居し、偶々重陽の佳節に遇ひ、山東の兄弟を憶ふて作つたのである。山東は一本に山中に作つてあるが、王右丞集には山東とあるから、今はそれに従つた。

獨在異鄉爲異客。每逢佳節倍思親。遙知兄弟登高處。遍插茱萸少一人。

**字解** 插茱萸、茱萸は吳茱萸で、倭名類聚鈔に、吳茱萸朱臆、二音、和名加波波之美とある。本草綱目に、吳茱萸今處處有之。木高丈餘。皮青綠色。枝柔肥。葉長而皺。似椿而闊。厚紫色。三月開紅紫花。七八月結實於梢頭。疊々成簇。而無核。嫩時微黃。至熟則深紫。有粒大者小者二種。小者入藥爲勝。懸其子於屋辟鬼魅とある。而して九月九日に此の木を頭に挿すことは、風土記に、九月九日折茱萸房以挿頭。登高飲菊花酒。則能辟惡氣而禦初寒とある。少一人少は缺の意。史記平原君傳に、遂聞君將合從於楚。約與食客門下二十人偕。不外索。今少一人。願君即以遂備員而行矣とある。

**義解** 我は獨り異郷に居て異客となつて居るから、日夜故郷の兄弟を思はぬことは無い、特に佳節に遇ふ度毎には、その思ひがいよく切である、さて今日は重陽の



佳節であるから、我が故郷では、兄弟相携へて高きに登り、各々茱萸を頭に挿み、菊花の酒を飲んで遊んで居ることであらうが、我が兄弟は、我れ一人缺けて居るのが残念であるといふて、話して居るであらうと、己が兄弟を思ふ心より、兄弟も亦己を念ふて居ることを知るところは、真に至親の至情である。

逢入京使

岑 參

【題意】 此の詩は岑參が西征の途中で、京に還る人に逢ふた時作つたのである。

故園東望路漫々。雙袖龍鍾淚不乾。馬上相逢無紙筆。憑君傳語報平安。

【字解】 龍、鐘、淚の多く下る貌、琴操下和歌に、空山歔歔涕龍鍾とある。平安、無事健康なること。

【義解】 東の方故郷の空を望むと、路は漫々として果てしも見えす、只遠いことを感ずるのであるから、涙は雨の如く下り、雙の袖は濕ひ盡して乾くひまも無い、さて今幸に都に歸へらるゝ君に逢ふたことであるから、手紙を托したく思ふが、相惜筆も紙も無いから、馬上で書くことが出来ず、實に残念なことである、君よ願くは我が家

人に、我が無事で居ることを傳言してくれ玉へ、これだけは是非御願ひ申したい。

題長安主人壁

張 謂

【題意】 此の詩は張謂が進士の試験を受ける爲めに長安に來り、一旅館に滞在して居た時、始めは丁重な待遇を受けたが、試験に落第してから後は、打て變つた疎略な扱に憤慨し、此の詩を作つて旅館の主人の壁に貼り付けたといふ説がある、兎に角此の詩は杜甫の貧交行と同じく、人情の輕薄を慨したのである。

世人結交須黃金。黃金不多交不深。縱令然諾暫相許。終是悠悠行路心。

【字解】 須、第一の目的とすること。然、諾うけ合ふこと、季布無二諾、侯嬴重一言の意。悠悠、疎遠なる貌。行路心、旅人は他郷の人で親しみの心が無い、故に人情の薄いのを喩へたのである。

【義解】 今の世の人は、交際を結ぶのに黄金を用ゐ、黄金が多くなると、交際も亦深くない、故にたとひ然諾相許し、爾汝の親しき関係でも、黄金が無くなると、終に悠悠たる行路の人の如くなり、途中で會ふても見ぬふりをして居る、さても人情の輕薄な



ことは實に呆れるではないか。

十五夜望月

王建

題意

此の詩は仲秋十五夜の満月を觀て作つたのである。

作者略傳

王建字は仲初、潁川の人、初め渭南尉となり、祕書丞、待御史を歴、大和中（紀元四八七—一四九三）出で、陝州司馬と爲つた、後咸陽に歸り居を原上に卜して文墨と親み、張籍と名を齊うした。

中庭地白樹棲鴉。冷露無聲濕桂花。今夜月明人盡望。不知秋

思在誰家。

義解

今宵は仲秋三五の良夜であるから、中庭には清光地に満ちて白く、樹上には鴉が宿つて居るのも見える、又冷かなる露は桂花を濕し、それが静で聲が無いから、天地は清寥として只秋月が隈なく冴へ渡つて居るばかりである、さて今夜の明月は、四海萬里、人盡く望み、賞玩せぬ者は無い、然し此の秋景を、誰れが一番深く感ずることであらうか、恐らくは我れに及ぶ者はあるまいと思ふ。

唐詩選釋終



終

